

常山紀談

卷之九十

183  
5  
279

東京圖書館

和書門

雜  
皮  
類

一  
八  
函

七  
五  
架

二  
七  
九  
號

一  
〇  
冊



東國綱目

名山紀談卷

之九目次

栗田家

井谷合戦の事

井小川

右工門野村太郎兵衛妓井友房を斬る事

豊田

北條征伐出陣の事附本多重次放言の事

井色直政

關白を討んと言れし事

鳥井源八郎

先登士志を論ずる事

一南部越後攻口の事

一上様日和といふ事

一伊奈熊藏兵糧と司る事

一蒲生氏郷の陣夜討事

并氏郷金の三階菅笠の馬印と免されし事

一武藏國八王寺城落る事

一大音藤藏雨森彦三郎功名の事



- 一 信雄卿那須と誦せらるる事
- 一 坂部岡江雪免さるる事
- 一 關白鶴が岡叅詣の事
- 一 關白宇都宮にて佐野天徳寺と物語れ事
- 一 蒲生氏郷大志の事
- 一 奥州葛西大崎一揆の事
- 一 蒲生家の士大將軍兵訓練の事
- 一 氏郷伊達家の刺客と免されし事
- 一 氏郷佐々木が鎧と細川に贈らるる事附黒塚の歌れ事
- 一 本多忠勝万喜が舊臣と呼出されし事
- 一 東照宮武田北條の跡御制度の事
- 一 東照宮武田の舊臣と召て御物語れ事
- 一 東照宮物具の御物語附小野木笠の事

- 一 秤御定め事附一步金辨當狹箱始りの事
- 一 酒井金三郎本と忘さるる事
- 一 成瀬正成忠信れ事
- 一 東照宮相摸堺御打廻りの事
- 一 豊臣關白五腰の刀の主と察せられし事
- 一 竹俣兼光の刀の事
- 一 本庄正宗の刀の事
- 一 冑の名様々ありし事
- 一 伊藤七藏高名の事
- 一 井伊直孝用意の事



常山紀談卷之九

備前國 湯淺新兵衛元禎輯錄

○秀吉黒田勘解由孝隆と豊前國と與へられ一揆處々に起る中も  
も枝井谷友房のもと下野國宇都宮彌三郎友綱が次男鎌倉の頃より地  
と傾したる子孫也毛利登岐守勝信と誘れ地主とウリ催し民屋と放火  
を黒田父子の馬の岳といふ城に移せけるを城下と押寄る長政其時十  
六歳妓井と討べきと勇まれけれども孝隆同心せられず長政其頃の吉  
兵衛といひけるが若士ども引具し切て出れを一揆ども一支もせず敗  
北するを追おけたり岐井の山中の險路にそびれ入れ多くの大石の陰  
に逃隠れたり大野小弁といふ若武者眞先と進きたると一揆起合せ七  
八人取巻て馬より突落しけり後藤又兵衛小河傳石工門久野四兵衛馬  
の首を引返さ敗北しけれども長政の馬廻りの眞丸と成て一揆勝に  
乗押詰ければ鎗と合そ一揆の木蔭谷かげより五人十人かけ出狩場の



鹿と射る如く竹の鐵の矢よて雨の降様に射たせけり長政馬より下立討死をべき色なりしと近習は者共馬よりさのせ退きければ一揆類も追かけけり長政の馬矢に中りしかば爰よて自害せんと言れしと菅六之助政利已が馬よ召れいへといへども聞入らず早上帯を解んとせられけると三宅三大夫若狭走寄大將は自害の所ふていはいはずとてかさ抱死馬よ打のせ片手お馬を牽け片手に長政とらへて我等生残りたるに殿と追討とや念もなくい地の利と見て引返し一揆の奴原追崩し申さんどて引退く菅の長政の鞆の組違ひよ手よかけて少しも離れず木屋兵右工門の長政の鎗を持て歩立にて續死たり一揆長政と見えり餘さしと付奉ふ三宅菅木屋と始とし岡本彌兵衛小河久大夫坂本七左工門己下五十人ばかり丸く成て思ひ切たる色と見て静よ詰寄て二里計追かけて其後の毒のざりけり後藤のいうとまたりけんちやうく緋の羽織と脱捨たりしと長政とらせ歸られけり

後藤慶々の武功ありて一万四千石與へ小隈の城ありしが後に枝井谷の軍物語よ及べば俄お病出しとぞ木屋兵右工門の長政よむかひ後藤小河が有さま大臆病の男よていと親子ともお取分て懸よせさせたまひ此兵右工門の誠よあるよもわらぬ体よいへども敵追詰來りなば一番よ討死して御目よかけいへしさてもく歎かしき御眼力やとゆくまで罵りて退きけり其後長政筑前と賜はりまに小祿の士皆祿よ増たりしに兵右工門の六百石よ鉄炮の者二十人司られりさの賞美なかりしかば人々木屋殿と岐井谷よて罵りたる事を憐たぐ殿は思召て斯いあるならんといへば木屋我も左思險事よ此憤なれば首よも刎られなんともへどもさもあらず是より後も軍ゆらば度毎よ大言と吐ちらし只今寵愛にはこる奴原の中よ武者操の悪き者ゆらば耻と與ふんと我思ひ出也といひければ聞者汝の下部のいひゆる口よ倒されなるべしと諫ければ今の祿よ削らるる



共口を死したきとよとて笑ひけるぞ

孝隆を馬の岳の矢倉お上り長政の敗軍と見て笑ひ居られしうば側より危く候疾加勢をせさせたまへと口々いひ々をいやく引ねくれたる味方の真丸となり静々と道を引退く吉兵衛なるべし危ふげもなしといはれしが果して長政事故なく引返されたり長政敗軍を口惜とて引おもり夜の物打被て臥居たり孝隆物主と呼て弱敵とば恐れよ初は勝と勝にそるもの也勝とくれば必ず敗れ本也と戒らとけり鹽屋善七郎といぬ侍長政の近習も仕へしが京も使に行此日は暮頃も歸て長政の寢所へ行けふの敗軍是非もなれ事候さばかりは者共小弁を捨殺し殿をも捨て逃たりと承候殿もよき討死れ所にて候ひき何とて敵も後と見せたまふや父祖の高名も瑕付申あろ口惜なれ善七郎が御馬の傍も在ならば鎗と合せ一揆の奴原追立て引取べ死に後膝先ふきたなき振廻も候はずや重て一揆と軍ゆふんも必死と思召定めら

れよとて座を立ければ長政も誓といふ思ひ切たる体也翌日善七郎又申けるいあながち口惜とな思召れ候ひそ一揆押寄候はゞ真先かけて切崩し耻と雪ぎたまへ善七郎の御馬の先よて討死せん逃たる奴原も勵されて軍とる程ならば鬼神ありとも恐るゝも足すと云慰めければ長政起上り物語せられけり長政の面目なしとて父の前も出ず孝隆扱の必死と期したる也と察し老功の者餘多長政に差添てをやりたる下知と禁せられけり一揆又上毛郡へ押寄れば長政火隈の海近き所の山も上り待かけて思ふ圖に引受一同も乗出馬のうけ場よかりければ縦横も乗割一揆敗北とる處と追立たり鬼木鹽田などいふもの討れ散れ成るると長政鹽田内記と手づから討取向もかけんとせられしと老臣ども馬より飛下り押へて陣と整るなり鹽屋善七郎の敵の中も乗入鬼木掃部が首と取右の方と見とを長政敵の首と取たりまれば又馬引よせ打乗追詰て首二ツ取しが痛手負て精神も乱れたるが尙



も若殿の功名と問聞て嬉しや先日耻辱と雪がせたまひぬ此上のおもひ置事なしと云けり長政善七郎が枕元に居よられしうば長政の手をとり此後能心得たまへ殿は討死したまへと申者のなき事候といへば長政涙と流し汝と先だける事の残多さよと咽ばるれば善七郎を見開き先の頃いさ先申せし必死と思ひ定えたるゆゑに候今度の高名よそ目出度けれ今生の御目見只今と限り也人の一代名の末代と申事の候といひも終らざる空しくなまけるもど比類なき者也と云わへり翌日孝隆火隈より來りて對面し若き者の戀る事なくては思慮の練ぬものどか一終りの勝と計れ只勝べ死とのみ思へば敗と取也其將は時より緩み見ゆれども卒爾に軍のせざる故に終の勝と全ふするよと教へられぬ長政又押寄んと云れまを孝隆制して要害と設け兵糧は道と塞ぎ馬の岳に歸られけり斯て一揆勢ひ尽されば毛利輝元と頼み和平しけれ共友房の病とて出ず中津川より三宅三大夫賤井谷より傳法寺

兵部使者往來して互に物語したるも或時三宅言けるは友房内室なしと聞く勘解由に妹は婚禮あらばいかよといぬ傳法寺夫の悦しきと也能くはからぬれんやといふに三宅われ年若けをば老人と相計てまろといひけり傳法寺の敵の妹を人質と取んぬ然るべしとや思ひたるよりなく三宅と頼みけり三宅我主君の心ともまらで容易も申出たる哉事調すば面目もいぬすなといひて長政は斯と告て孝隆も告遣しうば密謀となし三宅に孝隆書と與へ縁と結ぶの末頼母の事なまども例は鹿忽なふんどぞ書れたる三宅傳法寺と語りて潜に其書を取出して見せ吾とば常に鹿忽者と戒めが此度も又まか也といへば傳法寺是は既に聞届けられたる也と悦びかくと友房も告て是よりまらろか死なく中津川を越え出べきよと定りたる三宅又迎にゆけば友房三百人ばかりにて山中と打立けり三の丸の大手よて人を留次第減じてけり本丸の書院にて對面より吸物と出して酌の小川傳右工門なり野村



太郎兵衛着とはさむと相圖は傳右工門一の太刀太郎兵衛二の太刀と定たり長政盃とさしける時野村着を持って出けるが持たる盃と友房は投げ飛かより眉間と切る小川おくれたりと脇指と抽て切付をばさばかり過しき友房即ち討れけり供の者とは所々も手當して物具またる者共鎗すくめよして殺しぬ岐井谷軍兵と指向て打滅されけり小川野村一二の定め有しに違ひたりしうば小川怒て其夜野村にいひけるの岐井を吾初太刀たるべきに先と越れ面目と失へりいかよと問野村打笑ひ左思ひるゝの理なり能聞れぬへ年をいゝば吾の弟也汝功名の四度に及び我は唯二度也是を劣りたるものゝそなたよ先とさせて我後となば是ころ面目と失ふといふべけれ栗山う又我兄の多兵衛とならば前後とあらそひれん事似合たるべじかく劣たる我に争はれんはれとなげなき只免されぬといひければ小川素より必易き事也但ま心安くも切れたり尤とていよく親とければ人を野村が理りも聞

事也小川もよく聽入たりとぞ感じける

○秀吉北條と討るゝ時諸將浮島が原に並居て秀吉とまつ秀吉系緋威の物具着て唐冠の冑黄金をちりばえたる太刀佩て土俵の大なる羽盃と征矢一筋指仙石權兵衛が参らせし朱の滋藤の弓持て七寸有ける馬に金の瓔珞の馬甲うけ静ま歩ませて打通られけるが東照宮信雄と共に出迎ひたまふと見て馬より下りいかよ武心あると聞たりいざ一太刀参らんと太刀の柄も手を懸らる東照宮左右に人お向いせたまひ軍始に太刀も手とかけられ門出目出たく候と高らるお仰仰りければ秀吉何ともおのすして又馬に打乗通られけり

秀吉此出陣の時濱松の城も宿せたる本多作左衛門折節御使に参りて歸りけるが旅装の儘もて諸將の中へ進出東照宮と見かけ奉りていかよ殿のいゆよりかく愚になりたまへるや國と持ゆ人の城を人よのす事や候さるば女房おも人にかしたまひんうとぞ罵りける東



照宮彼は本多作左衛門と申剛の者よて候が家久しく睦くて只今のやうなると申にて候無禮の詞を申候と仰有ければ人々承り借の承り及びたる本多殿にて候ひけるよかゝる事申そ人多く有べきやと賞まわへり作左衛門物ゆらき人なぞけるよ三奉行れ中に命せられ政と執しよ甚仁愛の事のもよて獄訟と断るに理正しく四民懐死服しけり東照宮の神慮淺からぬ御事なり

○東照宮小田原に向はせたまふ時先陣の榊原康政と命せられ井伊直政御旗本と定先たまぬ直政毎も先陣の好まれしよ此とき少も辭退の氣色なうりしよ小田原よて秀吉うたへの人僅よ引具せられいと見て唯今取圍て討取べき時に候と進め申せまよ東照宮聞し召入られざりしかばさらば先陣たらんといわれしとぞ

○山中は城と責る時木村常陸介師春が士鳥井源八郎先がけして城に付名乗けり羽紫藤五郎秀一が士磯野平三郎ゆゑ來り汝の討取源八

と世よいはれたる譽の士なれども田舎そだちゆる武功と辨るす斯る場よて人のゆたれ氣後れそる物なる故爰よて名乗れば是よ心付て我先にと進むゆる思ふまよなる獨功名もならず物の譯もまらず名乗まよ死處よて名乗なりとわらひければ鳥井聞て平三郎の志の士と聞しに眞の士志よばまよざるよ人のゆたれたる時は尙高聲に名乗て人に心を付き力よ添て多くの人を用よ立るころ武士の義なれ獨高名をせんとそるの小事也いふよ足すと答へしかば平三郎いふ事なかりけり

○小田原を圍ひと死國清公の攻口の搦手の山の上なり目の下に見れろし鉄炮を打入けるよ城中よりあけ矢にうつ鉄炮烈しく士卒進ま兼たる時南部越後銃口を空に向て打せたり其玉雨の降がとくなりまかば城中ひるむ所を見濟し鉄炮よ山ばなにならべ透間なく打せて攻破りけり



○同時九鬼大隅守嘉隆日本丸といぬ大船を乗廻し南の海上と取巻り此所のあら海にて東風吹時の波浪山嶽と倒しうくるが如し船とかけ並る事思ひもよらぬ所なるも秀吉城とかままれし間五十餘日風靜に波穩か也是よりして小田原海邊風なき日と上様日和といひなすのけり

○同時東照宮伊奈熊藏と召て仰出さるゝ事共あり其時伊奈去年より兵糧の用意して沼津と運びたり然るも此箱根山中は穀物の價江尻沼津と相同じ遙く運漕せんより爰まで求る事然るべし心得がたは事也と申けると東照宮聞し召夫の長束大藏大輔が謀なり長束の武功勝れたるおもゆふされども斯る謀の長じたる者なれば秀吉城主として瀧せらるゝぞう一汝が職めて兵糧運漕の事よく心得べは心得がたしといふの吾も心得がたしと仰ゆりければ伊奈汗と流して退出しけり  
○同時蒲生氏郷金に三蓋菅笠に馬印をされしと申されしも秀吉

夫の聞ゆる佐々成政が馬印にてたやすくの免しがたし今度小田原の武功によりて望む所にまかせん物といわれれば氏郷今度の軍に人の目と驚りすうさすば討死とおもひ定先繪像とかうせて日野の菩提寺に籠先打立ける斯て五月三日の夜のた曇りけるお紛れ城中北條十郎氏房が持口より夜討とまたりけり氏郷も今夜の夜討入べはよ解るなど下知せられしに果して廣澤兵庫秀信一作助重大將まで押寄せり氏郷の物見の兵町野万右工門へ行逢ぬ弓箭取直し指詰引詰射れども叶ずして引返せば敵進を來て柵の木と打破る蒲生源左工門郷成田丸中務直政町野右近幸和切て出爰を専途と戦ひけり氏郷銀の鯨尾の冑に緒とし先

氏郷の許は新に仕ふる士も吾家まで銀に冑を着たる兵度ごとく眞先も進み出て働くなり此男も劣らずふるまふべしと言れたり氏郷彼冑着て毎も眞先かけられしとぞ



兼て一丈餘の鎗と設け置れりと提げ追立々々進まれけるも廣澤兼  
て鉄炮と後陣と並べ置たをば追來る寄手と打たてけり廣澤の聞ゆる  
剛の者なるが鎗を横たへ片足と堀中へ蹈入大音上一鎗參ふんと呼  
ると氏郷聞て飛かゝり突合けれを蒲生左衛門郷可同五郎兵衛治郷佃  
又右工門等駈來りよめき叫んで攻戦ふ廣澤の今宵夜討の大將廣澤兵  
庫一番鎗と高らかよ呼をりけると氏郷目にう々て堀の中よ飛入て撃  
とらん面もぬらす胃の鏝を傾け鎗と取延たさ立られしに敵兵二人  
氏郷の鎗と取んとする事七八度よ及びしかば氏討廣澤とば討もさ  
れけり寄手餘りはげしく戦ひければ廣澤も叶はじとや思ひけん城を  
さして引退く氏郷いづく迄もと云まよ先よ進んで追れりとも門  
と閉て鉄炮と搏出せば引返されしよ胃よ矢二筋折かけ物具よ鎗の疵  
透間なく十文字の鎗さよの如く也一うば秀吉感狀よかの馬印免さ  
れけり

○武州八王寺の城主北條陸奥守氏昭の小田原よ有て家臣留守きたり  
しに前田利家上杉景勝攻むとて先よ降參しける北條氏邦に使を城よ  
やらせ小田原既に破れぬとく城を渡ししへと言送る中山近藤野野等  
從はず氏昭降參せば證書をたまひりて城よ出べき旨下知とべし然ら  
ずして降參せば士の瑕瑾なき氏邦が如き臆病者の一人も城中よい  
はずと答へたり利家景勝も其義よ感ずといふとも扱止べからざれば  
一万五千の兵よもて圍れたり甘糟清長攻入て火よかくる狩野一菴近  
藤山羽助實金子三郎右工門家重死狂ひに切て出討死を横地監物の氏  
昭の第一の長臣なり火よえ上れば今日よ限りに散々に戦ひけるに寄  
手討る者多し中山勘解由家範の武勇の將殊よ八條修理滿朝が馭法  
と傳へ關東無双と世に稱せらるる人なり大敵に少しもひるまず二百  
計にて突て出爰よ最期と切て廻るお寄手新手を入替攻ければ僅十五  
六人を討なされたり利家誰う中山にゆかりあると問るよ松山に降



人根岸主計定直が妻の中山が妻と兄弟なり小岩井雅樂助の中山が取法の弟子なる由と申す利家とく中山は味方に属せよといふべしとて兩人を城中へ入れし中山既自害して其妻も自害したるがまだ息うよりて有れば詞とかいして馳歸り斯といへば利家大に惜まをけり監物の切ぬけて逃たり北條家關東の城々多しといへども豆州龍山の城の外に多く降参したるに八王寺の兵城を枕し戦死せし事を東照宮聞し召其義心と感し思召れ中山が嫡子助六郎昭守二男左介信吉も賜り昭守が子信守大坂の軍も功あり信吉の後水戸中納言も仕へて備前守と稱す狩野一菴が子主膳も仕へ奉りたり

○八王寺の城攻め城兵切て出死在ひたる時利家の小姓大音藤藏一番首を取たる處に雨森彦三郎續て首取て利家前まで至て實檢し備ふ一番の大音也と申て二番首の帳も記させたるに利家大に感せたる其頃大音の利家の勘氣と蒙り居たるゆる數度高聲に姓名と名乗しかば諸

人一番乗といふ事を知てけり

○北條亡びて後秀吉石垣山の本陣に諸將集りて酒宴も及ぶ時信雄の舞の上手と聞あはれ一曲觀申度と秀吉いはれしと信雄吾と侮ると口惜くや有らん不吉の詞と舞れたれば秀吉うらる悦の中に忌々しき事ども心得ずとて那須に追やられけり此時までも千餘騎の士と具せられしが僅に打連て那須に趣られぬ時を計らず勢ひと知す無益の空言も國と失はれし事のうたてさよと人となひひつへり

○北條滅亡の後秀吉坂部岡江雪齋も汝先年北條に使として上京し約せし所忽ち背て名胡桃の城と取事氏直の姦計もや又汝が詐なるりと責問るると直も申さんと答へしうば秀吉大に怒り手拵足極と並べ江雪を呼出し刀を奪取左右の手と引張庭上に引居て後秀吉罵て曰汝が約せし所も背く事誠も憎むも餘りあり且日本國の兵と動かし主君の國を滅せしと汝に於て快さやと譏らるると江雪色も變せず氏直更も約も背



くの心なくい邊鄙れ士愚みて名胡桃を取終に弓箭よ及て北條の家亡  
びぬる事江雪が思慮いうんどもすべき様のいはず誠に家れ亡ぶべき  
運命よやいらんされども日本國の兵と引受る事北條家の面目也此外  
申べきとなし疾雷と列られ候へといぬ秀吉顔色打とけて汝は京お引  
上せ磔懸んと思ひまに大言と吐て主君と辱し死す大丈夫といぬべ  
し命を助ん吾に仕るよとて許されけり坂部岡と改免て岡と稱しける  
の此時よりのとなと

○秀吉鎌倉の鶴ヶ岡お詣て八幡宮の戸を開かせ頼朝の像と見られしが  
背中と打たつき微賤より出て日本と掌握ると我と御邊と二人也然れ  
ども頼義父子鎮守府將軍とまて東國の者ども久しく親と多かり死  
が小島より兵を起されしに關東の靡き從へるも謂れな死よあらず我  
の土民の中より斯日本と思の儘よすれば功尙高しといふべしといは  
れけり

○秀吉陸奥と趣く時宇都宮にて佐野天徳寺を呼び

野州佐野幸澤山の城主佐野小太郎藤原宗綱天正十三年討死して子  
なし家臣連判の起請文を小田原に送り氏政の弟氏忠とめて家と繼  
ぐ宗綱が伯父天徳寺了伯の佐竹の一族の中と乞て佐野の家と嗣ん  
どそれども是と用ひず了伯の夫より京都と趣死黒谷と閑居せしと  
秀吉北條を伐るゝ時郷導とせられしなり

物語させて聞れまゝ武田上杉の弓箭盛なりしとと申ければ秀吉冷笑  
ひいかゝ天徳寺謙信信玄といふ坊主も疾死たるこそ幸なれ今おなが  
ゝへ居ば一人よの薙刀とつたげさせ一人よの吾興の先なる朱傘と持  
せて馬の前に召具すべきま此世になければ力なき何條車かゝり座備  
まなたはと也とぞいはれける

○秀吉陸奥と趣き蒲生氏郷お八十万石の地と賜りけり氏郷退出し  
柱よ倚かゝりて涙ぐみけるを山崎の某居寄て辱く思はれんと尤なり



といひし又氏郷私語さきやまて吾都近き所さきやまにて小き國一ツ賜たまひらば終つひも天下に旗はたと揚たげんに邊郡へんぐんに棄すられたれば何事なにことか仕出つかとべ死志しじの空しく成たるなりよりておぼえず涙なみだのながるなりよとを語かたられける

○天正十八年奥州葛西大崎一揆あきの時氏郷名生なまひの城しろもわご會津かいしんも飛脚へいきゃくをもて鉄炮てつぱうの玉薬たまぐすりと人ひとも見みどがたふれざるやうと計はかて運び來れど下知したせられしかば山伏やまぶどかたらひ笈たの中なかも玉薬たまぐすりを入れて頭巾かぶと螺貝杖らがいじょうと携たて湯殿山たうでんも詣まるありさまして送りけり是蒲生左文はらひが謀はかなり

○蒲生氏郷笠井大崎にて軍いくさも佐久間備前同内膳兄弟さくまと先陣せんじんとせらるるに下知したすると氏郷は心に叶あはず此兄弟このあにの元秀吉もとひでよしも属ませしが秀吉ひでよしより氏郷うぢごうも賜たまひりたる士大將しだいじやう也氏郷明日あしたは軍いくさは神田修理外池信濃岡野かんだ左内浦生源左衛門等先陣さないらせよ佐久間兄弟さくまの見物けんぶつせよとぞ下知したせられける先陣せんじんの士大將しだいじやう六人相集あひまり佐久間兄弟さくまの軍立いくさもあさして斯仰承さかりぬかのく討死うちしえたりとも已まが躬みと捨て只汚名けがなと出でさるまでの事

にて斯仰さかと承うはりたるかひもなくして御大將ごだいじやうの耻辱ちじよく也然らば進退しんたいの節ふし内うちならしせず心叶こころあふまじとて先陣せんじんの軍兵いくさを打具うし至野いたも押出おししかけ引ひのあらし五度ごたも及びおよびけれども尙調なはず六人むにをあひて明日あしたの軍いくさに殊ことに大事だいじなる故ゆゑかやうも馴なまお及びぬるよ人々の進退しんたい以もの外調ぐわいじやうをすいかよも能心得よくいへど再三詳しやうも申聞まをせさて再拜さいはいと取下知したするも進退しんたい節ふしもあたりまかばさらば明日あしたの軍いくさのあも胸儘むねまなるべまど悦よろこびいさまで果はして敵たと切きなびけ大勝だいじやうを得えたり淺野長政あさの吉よれ命いのちもて陸奥國りくおも有あしかば其軍そのいくさの有様ありさま駆引かきひの圖ずも當りたる終つひも見聞けんぶんも及びおよびざる所也ところなりと褒ほられたりとなり氏郷うぢごうも大方おほならず悦よろこびて六人むにに威狀いじやうを與あへていさよの物添ものぞて賞美しょうびありけり

○伊達政宗だて蒲生氏郷はらひの威いも壓おさるるとと心中こころに深く憤いりて氏郷うぢごうを殺ころすべたと思案おもして數代家すうだいけに仕つかへし者ものれ子こも清十郎きよじやうといへる十六才じゅうろくさいも成なる者もの容貌ようぼう勝かれて艶あやなりまも密ひそにたくめる事を語りさかせ田丸中たわらな



務少輔が兒小性も出て奉公させられけり田丸の氏郷と姻家の親ま  
みゆれば來られん時便と伺ひて刺殺せと此事也清十郎が父の方へ遣  
しける書と關所よて改め見しより事起りて其謀の泄たりまうば清十  
郎と獄も押入此とと秀吉も告るといへども秀吉遠く慮りて強て伊達  
家と和平せさせられぬ氏郷清十郎を呼出し吾過て罪なき義士を獄も  
入辱と與ゑたるよ其君の爲に命と捨て忠をいたと賞せざるよ餘ありと  
くく伊達も歸るべしと禮義正しくもてなして歸されけり  
記せし書に清十郎が姓をもらしぬをしきとなり

○氏郷の許お佐々木が鑑といへる名高の器あり細川忠興いと懇よ我  
お賜はもと乞れしかば亘理某是は世久しく傳はる物にて似たる鑑  
と贈りたまへといひをければ氏郷  
な死名ぞと人にいひてやまなまし心のといひうと答へん  
といふ歌の耻かしきよとてうの鑑と贈られけり

蒲生は元江州の士にて佐々木の臣也氏郷伊勢の松坂十二萬石なり  
しが後會津を賜りける時の四十才の頃也佐々木承禎が子四郎太  
閤の時僅二百石與ゑ太閤の咄の席に呼出されしが伏見にて太閤の  
前より退出する時氏郷昔のゆゑも四郎が刀を以て従れしと也又安  
立郡に川あり向隅も黒塚あり安立の氏郷の領地なりしよ黒塚の伊  
達政宗の領地なりとて争の有えよ氏郷平道盛の歌に  
そちのくの安立が原の黒塚ににまもれりといぬのまはとか  
とよめるとありいかにと申されしよ聞人黒塚の安立が原に属した  
ると分明也とて政宗争ひとや先てけり

○本多中務大輔忠勝も上総の小瀧十萬石と賜りしかば小瀧も趣た  
土岐彈正少弼頼定入道慶岸の士とも呼出して祿を與ゑたり彈正  
の同國萬喜の城に居し故世に萬喜少弼と稱えて武勇の譽ありま  
なれば此を問に舊臣申の萬喜常も房州の里見義高と弓矢を取ひが敵



と怠らせんが爲に舞臺と設け踊りとさせ城門を明かふるとて果さず  
船着のけのしさを平し里見が將正木大膳時綱寄來り船より上る時  
慶岸城を飾りたる紙旗を絹の旗に立換るとひとしく古き門より不意に  
打て出忽ち切崩したり是より土岐が地を攻入事いはずとかたりけ  
れば忠勝聞て土岐の甲越の兩雄將にも劣らぬ人也と稱し其後舊臣に  
其家の事と問時の必萬喜殿とぞいひをける

○勝頼亡びて後 東照宮甲斐と治光たまふに法度の信玄より用ふる  
處を改易る事なりれ年貢の少く納んと仰出されしかば百姓大に悦び  
ゆゑり小田原亡いて後其地を治光たまふも又同じ諸民大に悦び數百  
年の恩義相結べるに同じかりき

○同じ頃 東照宮武田家の土横田甚右工門等と召て信玄の事ども物  
がたをさせて聞し召ると時御坊の時火繩のいづくまると御尋ゆり  
柿は澁に石灰と入て火繩と染いへば年経ても用られいと申す横田又

の城意菴など信玄は事をば御坊と仰ゆりけるとぞ又武田家にて鐵  
とゆるくつ先いの敵の肉の中よやヒリの殘らん爲なると申し聞召士の軍  
も臨むはまな其君の爲ぞうし射伏たれば吾軍の利となるべし後まで  
人と苦まむるは不仁の業あまぞあれ今日より我家の士のやヒリと堅  
く詰よと仰出されけり

○東照宮仰し物具の美麗なるは無益の事也又重くするとも益おし井  
伊兵部は力も有て重き物具まゆれども度々手負しなり本多中務もさも  
なくて薄手負たる事もなま只戦ひ易うらんやうと心懸べき也下部の  
薄き鉄の笠と着せたるぞよき急なる時は飯をも炊くべしとぞ

鉄の笠の甲州よりも下部は着たりまどかや畿内の方にいなりま  
に丹州龜山の小野木總殿助足輕巳下の者も鉄の笠を着せける故に  
其頃の小野木笠といひけると也

○東照宮關東御打入の後甲州は在ける秤と造る守備兵三郎といふ者



伊井直政も申て關東黄金白銀等と商賣するに定りたる秤を用ひられん事と條がひければ夫より今の制の定めさせたまひたり

京も後藤德乗といぬ彫物師あり 東照宮關東御打入の後德乗が弟子を召けるも遠國と嫌ひし後藤庄三郎我行んとて關東に至り寵せられまかば後天下と知し召ば願の一ツ叶たまへと申も何事を易き事よと仰ゆりさらば黄金と四ツに切て通用せむやと望まけり果して海内 東照宮も歸しければ庄三郎が志のごとく仰出されけるより今の登歩金といふの始まれり但し甲州に信玄の時碁石金といふ物ゆりさとは夫より前ふ碁石金の外ふなりしよや一歩金は碁石金に類ひたるよやあるべき又信長の時今の并當といぬものゝ安土より始まれり其始は小芋得邊の中ふいかで色々物入られんとて人信せざりきといぬり狭箱も同じ頃造りのじめたりといぬ又大坂の津田長門守始て造り出す共いへり

○原吉丸酒井金三郎共ふ 東照宮の近習お仕へ申けり伏見よて御庭に出させたまふ時原御太刀を持て庭にかり草履はくお進なく既よて時石の上よ有けるに酒井草履を與へければ人々譏ると聞し召子細と御尋ゆて酒井承り原の元下總の笛井は城主原一部が子にてい臣が先祖原に仕へしと承りぬむかしの主君のゆかり既よて炎天に居たるを見るよ堪かぬいと申ければ本を忘れざるの士なり吾子孫にも斯のごとくなるべまど大に御感ゆて

○秀吉大坂にて馬揃の時千貫矢倉に上り觀られしよ黒き馬の太くたくましきよ乘て紅の沓と後輪に付たる者ゆり何者ぞと問るよ徳川家の土成瀬小吉なりと申と祿のいかにと問るよに 東照宮二千石與へ置たりと仰られしに秀吉ゆりれ吾も奉公せむ五萬石與ふべたといえれしよ其後 東照宮成瀬と召てまうくの事ゆりき秀吉に仕なんやと仰有ければ成瀬承りまの御情な死事にいと申といやとよ汝秀



吉よ奉公せば我爲もよかりあんと仰られしよ成瀬涙をながし不肖の身祿と食りて主君を捨奉らん者と思召けるをなさりけるも愚にひ只疾自害して心をゆかさん物と申けまば其よしと秀吉お御物語り有りけり後に東照宮長臣ゆまた召れ古ふ聞え三尺の孤と託すべきといひし人は成瀬ふてまそあれと仰られけり小吉正成後隼人正といひしなり

○北條家亡て後 東照宮甲斐相摸の堺三増嶺を御打廻りの時過し永祿年中の戰場を御覽ありはげ山なりま故信玄兵を押通またやすく軍よ勝なり北條家武略に拙く山林と伐ゆらしたる故ぞうし生茂たらんよいかで信玄陣をくべ死山と林にせよと仰出されけり

○秀吉伏見よてある日廣間よ出られま五腰れ刀を見て試よ其名をいひんとてまこれま違はざりければ前田玄以誠に神智のあやしきよと驚死たりければ秀吉笑て何の子細もなれぞとよ秀家の美麗と好

むが故に黄金をちりばたたる刀是なるべし景勝は父の時より長剣を好たり寸の延たる刀よ是よあてたりき利家の又左工門といひし時より先陣後殿の武功よより今大國と傾れれども昔よわをます草卷たる柄の刀是他の主に非ずと思へる輝元は異風と好む異なる体よかさりなせる刀是なるべし江戸大納言の大勇にして一劍を頼むの心なし取繕ひたる事もなく又美麗もなれ刀其志よ叶ひたり此よ以て察しけるに違ひざりけりと言れけり江戸大納言の 東照宮の御事なり  
○謙信の許よ赤小豆粥竹俣兼光谷切とて三ツの刀あり竹俣兼光のものと越後の百姓持たりよある時山中を通りよに雷烈しく鳴たりしかばゆいや落かよるうと思ひて刀よ抽頭に指當目とぬさき居たりやよ有て空晴しに刀の鋒より血流を服よるまたり又或時大豆と後に入て歸るまに袋の綻びより一粒づよまほれけるが鞘よあたりて二ツよ成しかば怪し見えに鞘のまれて又の機よ出たりしよ當りし故也双な



き刀とて竹俣三河守乞得しが謙信後にさされけり弘治年中川中島合戦に信玄の兵輪形月平太夫といふ者鉄炮をもて終つひしと謙信馬に乗よせ一刀を切伏てかけ通られけり後甲斐の兵ども是と見るも輪形月の物具かけて切られ持たる一兩箇の二の見通の上より切放したりいかなる刀にてかく切られしといひあるも則ちの兼光の刀也けり景勝の時京にて研せしを越後にて人々に見せて京の水までどきたれば鐔の光殊更勝れしと悦れしよ三河守熱々を見て此の贖物よてい子細い此刀はばきより上一寸背も馬の毛の通るべきばうりの穴のいふれと知人外にいなしと申せさらばとて竹俣と京ふやりてさがし求るも眞の兼光の刀と清水の南坂より取出すかくと石田三成も告て贖物たる者十三人日の岡にて死刑せられけり竹俣越後も持歸りてかの穴に馬の毛を通して景勝に見せけり其後此刀太閤も奉る秀頼亡て落武者取て和泉河内の方へ行たりと聞えしうば此刀と献する者ふ

の黄金三百枚賜るべき由仰出されしかども其行方終も知る人なりとぞ  
○本庄越前守兼長の越後の勇將なり後景勝上杉十郎憲景が藤と本庄も與へらる本庄出羽の庄内大寶寺義興と戦ひ勝て二男千勝丸も庄内と與へけり本庄最上義光と出羽の千安が表にて軍ける時最上は軍敗北せしに義光の士大將東漸寺右馬頭口惜死事と思ひ取て返し首一ツ提て越後の兵も紛を兼長を目もかけて只今敵の大將と討取ては實檢も入れ奉らんと言て馬も鎧と合せかき寄て正宗の刀を以て背と打つ明珍の冑なりしかば筋四ツ切削りたり兼長右馬の頭を切て落し首に添て景勝も出またり刀をば本庄に返し與へられしが後故有て 東照宮の御刀となり本庄正宗といへる此刀なり

○加藤嘉明は冑の形を富士山と造りなきて名をも則富士山といふ具足の胸も天人の雲も乗たると蒔繪もまたり竹中重治が冑の一の谷明智秀俊が冑は二の谷といぬ舞州一の谷二の谷相並べり又柴田伊賀守



勝置が背は鉄蓋が峯といふ是ハ一の谷よりたかく峙ちたる山なれば  
斯名付しとかや此餘浦野若狹守が小水牛黒田長政の大水牛日根野が  
唐冠の青原隠岐守が十王頭福島正則の四ツまた鹿の角本多忠勝の佐  
藤四郎がうぶと蒲生氏郷の銀の鯨尾伏木久内がむり蛤武田信玄の諏訪法  
性秀吉の八日の月加藤清正の長鳥帽子矢田作十郎が鯉のかぶと藤堂新七  
が帽子なごいへる多し細川忠興の山鳥の尾のかぶといへるも名高玄關  
ヶ原の軍は忠興かの山鳥の尾のうぶと着銀の天衝の指物なりしに遙に  
見て唯舞鶴のやうに有けるを東照宮かぶと指物と映あひて面白くと  
て乞得させたまひ台徳院殿は悉らせらる

○信長江州小谷に城攻め伊藤七藏先がけしたるみ従者取付たる故上  
帯されて刀も脇差も堀下は落し七藏少しもひるまず乗込で柵の木取  
て敵三人たゞき伏せ功名しけり七藏父を若狹といぬ相州の人にて武  
者修行し尾州前田村に居ける頃信長呼出されけり七藏尾州三本木の

軍は事急にして編笠とかぶりながら一番鎗を合せける故信長大に賞  
美えて編笠と呼ばれけり後秀吉は仕へて度々功名有しかば紫袖井筒の  
紋廣袖の小袖を與へられれば甲の上は着たり秀吉の旗奉行と成たり  
○井伊直孝といひく人毎に具足櫃と持せて早く取出と志と用意する  
者あり取出と聞も遅きをこの事ゆゑは何時も素肌にてつけ付てまそ  
よけれ具足と着たると着ざるとの差別なき事也と申されけり



常山紀談卷之十目次

- 一 馬場重介武功の事
- 一 利家白雲の琵琶を種村に與へらるゝ事
- 一 秦桐若勇威の事
- 一 澤村大學朱柄の鎗と持とる事
- 一 加藤清正天草の一揆退治の事
- 一 森本義大夫組討功者の事
- 一 朝鮮陣の時 東照宮御遠慮の事
- 一 伊達家の士卒異風出陣の事
- 一 朝鮮南大門合戦附後向の備の事
- 一 國富源右工門組討の事
- 一 加藤光泰大言の事
- 一 吉田又助川巾と積る事
- 一 清正虎と狩れし事
- 一 清正船と取せし事
- 一 太閤名護屋にて大言の事
- 一 菅政利後藤基次虎と斬る事



- 附羅山先生南山銘の事
- 一 泗川の城に狭間と切る時の事
- 一 加藤嘉明拔懸高名の事
- 一 淺野長政諫言の事
- 一 井口與市主従功名の事
- 一 清正の武備嚴重なりし事
- 一 朝鮮より虎と象とを渡す事
- 一 清正は士卒土穴に住し事
- 一 森本庄林黒白鳥毛の鎗鞘の事
- 一 清正の花押筆書多うりし事
- 一 後藤基次龜甲の車と造る事
- 一 和軍館合戦栗山利安武功用意の事
- 一 栗山利安儉約の事
- 附日根野備中守黒田家と銀と返す事

常山紀談卷之十

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○馬場重介職家の陸奥栗屋川貞任が裔孫よて備前邑久郡北地村よ來り居しが其後も安倍といひけるに京都より來り玄馬場氏の人豊原に居て其女と妻として遂よ馬場と稱えぬ重介稚名と岩法師といひて十三歳よて邑久郡戸石の城主浮田大和守よ奉公し天文十四年浮田直家の乙子の城よ在て大和と軍あり直家の士池田太郎三郎と岩法師東北地村荷蓋の島よて鎗と合せ疵と装りて戸石の城お歸る今年十四歳なり大和守膝よ抱上て疵の口と自ら吸れけり無双の剛の者なりとて名と二郎四郎と改めさせられぬ程なく直家花房又七近藤五郎左工門説一よ六郎星野十郎と大將にまて戸石を攻む二郎四郎白團の腰ざし指て左衛門の城戸口よ出る近藤見ていかよ引か進むいと詞とかくるよ二郎四郎軍場に臨で引と云とやあるといひも終らぬよ花房星野とも手利の



射手よて弓取直ま是と射る花房が矢の中指にあたり星野が矢の二郎四郎が持たる楯ともどはぎまで射貫く二郎四郎物ともせず敵と追拂ひて歸れり天文十七年赤坂郡鳥取の砦と大和守攻て軍移り二郎四郎膝の口を筈深と射させ二町ばかり引き退きたる所に味方に泉養坊といぬ山伏来て其矢と拔ば足なへて歩むとゆたのす大和守の馬に乗て三三町引退たりうとも馬を返えてければ味方も隔りぬ敵追かけ來らば討死せんとおもぬ時妹婿なりま片山彦三郎といぬ者の弟來て馬に抱乗せたるお血鎧と越て流を朱に成たると敵見て深手負たりと見なしたれば十文字に鎧を取延べ頻にあけ落さんとすると幾度といぬととまらず漸くは遁れ得て歸れり首を取て見とられて見るといふ諺あるは此時なるべいと二郎四郎常お云けると也是十七歳の事也後二郎四郎直家よ奉公一與力六十人付られたり美作三星の城の浦上宗景番手の兵とやりて守せたと安藝の毛利家より附城と構る三村

家親大將として度々合戦あり直家より馬場を加勢とまて三星よお光たて馬場愛宕精進とるとて五月廿四日細き流れに行て身を清むる處よ敵出たりと聞直よ行向へば三星よりも鎧提たる士一人來て馬場に並び進む敵を追詰たれば附城より出て是と助けて城よ入る門内と見れば混背の兵十四五人折敷て鎧の先と並べ待りけたれば靜々と引返す宗景威狀と與ゑらま直家夫より重介と名と改させ家の字とやられけり備前上道郡妙禪寺の砦の合戦よ重介の刀敵の鎧よて相戦ひ溝を飛越て敵の手れ下にくり入りんとせしに躓てうつぶしよ伏たり敵勇みかくりておもぬ處と突はずし行移まるとつと立上り切伏て首と取同郡土田の軍にも長六尺よ餘れる梶井といふ兵と討取たると角南怒菴見て白き浴衣を着右の肩をはだぬぎ太刀打えたる兵の有さまむかしの辨慶などやうくも有らんと驚たりといふ則重助也永祿十年五月十日土田の上蟹目の軍よ敵五人鎧と横たぬ山の上より來るを重



助の坂に下り有て一人射倒したれども味方は何れもかず引返り時山の腰と引退く味方敵追詰て既と討れぬべく見ゆれば返し合せ敵と切なひけ味方を助けて引取れり備前岡山の城主金光與次郎と直家謀と以て殺し城と取得たれども近き邊りも敵多ければ戸川平右工門を城番とそるも寄騎六十人とな行兼たり重助我かいらんといふに何の子細か有べきといふを直家も告てゆるしたれば重助が寄騎六十人一人も辞退そる者なれに戸川が與力もはげまさきて重助初勢ならば行んどいふよよ戸川馬場三年岡山にゆり美作三の宮の城を直家一時に攻らるる時城主村上勘兵衛士卒六十人ばかりよて突て出る重助眞先よ進み鎗武者四人薙刀武者四人と戦ひて城門の際まで追打と敵鎗と投突にしたるを奪ひ取て歸る高城にての軍も直家重助を谷の受手とと敵來りざれば谷より上る處も山の半に鉄炮を五段にして待かけたる處も行かより三段追崩と四段より搏たる鉄炮に右の膝よりまりへか

けて打透さき敵聲をかくれば重介中々すといぬて四段とも追たてる崩れたる土手あるも背に鎧を傾け寄添て待たるも柴折りけたる谷の向ふより打鉄炮背割具足の右の肩かひから骨の内より臂まで打貫れ目暗となり氣と静先て見れば田中藤介間近く來れり重介田中と呼りけ大事の手負ぬ此所と退んとせば追討も遣ん爰と死所とせんといふ藤介我一支とべーといふ重介五間計歩とて郎等の肩も手をうけ靜に退くと敵慕ひ來れば藤介鎗を合せ追退て歸れり鉄炮も中りし時大木を以て袋を突通そが如く覺え物の色目分れず只朝顔の花の色も見えたりと後に語りたるとなり備前兒島八濱にて軍あり浮田七郎兵衛忠家の子與太郎大將よて戸川平右衛門岡平内巳下渡海し麥飯山の敵城近き邊りよて草と蒔る時敵出て追たゆる與太郎馬も輪とかけて味方の兵と求る所も鉄炮内背に中りて馬より落つ中村宗介同じく討死と重介馬を射られ乗放し歩立も成ぬ月毛馬羣毛馬黒馬も乗たる敵三騎



重介と目よりけて馬を乗寄る重介敵に敵と乗りつられしと鎗の銚を  
後よなして脇に狹き静々と退く疲れまけ討死よと思ひたるよ敵引て  
助りぬ戸川見て今日の勤ゆる我一命を繼たりと重介を譽たる處に寺  
尾孫四郎今日の重介と見すといふ重介先にて見ざるか後よて見ざる  
か一番よ進きたる敵の馬の毛色物具いかよと問ふ孫四郎赤面して  
詞なし重介吾鎗脇よりとて後の證に立れよと言て敵一人射倒した  
る人有といへば鷹見傳兵衛進み出て某にていひ死といふ中納言秀家  
大坂より備前へ下らるる時雨中の徒然よ浮田修理同太郎左工門花房  
又七三人を呼で軍ものがたりの時前代の鎗柱功の勝れたるの誰ぞと  
問るよ馬場重介幸和織部寺尾孫四郎三人と答ふ秀家聞て幸和寺尾  
の武功の有つれを輕薄なりと聞りいゆても重介が人お越れたる事  
なしと聞ければ重介おる勝れいはんれといひれしかを三人重介が  
武功の申に言葉も候はずといふ重介貞實よて諂ひす城下の近江邊り

よ引込て此頃の耕作して有るよと秀家聞て三百石加祿の折紙を  
戸川肥後よもて重介に與へらるいかにまたりけむ事達せず重介是を  
聞て愈出る心なくて遂に秀家にも仕へず七十七よて病死と士の飯初  
にもたなき心あるべうらざるなり吾數度の戰場に臨み百死の中お  
一生を得て斯全く終りぬると遺言しけり其子孫池田家に仕へけり  
○種村肯稚寺はもと柴田家よて譽れあり後招かるる人々多かりけを  
きも仕へず前田利家懇お迎へられしかども出ず利家種村が琵琶を彈  
する事を好むと聞て白雲といぬ名物の琵琶と贈られしかば其志よや  
引れけん利家よ仕へて佐々成政と越中朝日山の合戦に目を驚かそ功  
名と遂たり其後淺野長晟よ奉公して彼白雲の琵琶の今淺野家にあり  
とかや

○黒田家の士に秦桐若といふ剛の者あり唐國扇長よ一丈計もあるを  
指物よまける故敵見知て近付ず或時さし物よかくして近々と成て不



意ふ出せば敵大に驚きて引退きたるやどの者なりけり

○駿河を攻らるゝ時 東照宮横目の人と召てむかしより皆朱の鎧は柄瑤瑠の柄の武功勝れたる者なふでの持せざるゝ近頃は持するもの數多ゆりときく心得がたは事也改先よと仰出されけるゝ皆朱の柄の鎧持せ置瀧軍のたち付と着て通る者あり誰ぞと問ふ細川越中守が士澤村大學と答ふ此よしと申けまば 東照宮其大學の若は時才八といひつるが小牧よての事なりし秀吉二重瀧の軍兵と引取る時秀吉六萬ばかり青塚に陣せしと吾小牧よりかゝ寄て引退く敵と打破る其時細川忠興秀吉の先陣よ有て才八其先よ進みて鎧を合せし有様今も猶目れ前よ見るがとく覺へたりかゝる大剛の者に持せべしとて其餘は者と禁ずる事よと仰られまはば澤村傳へ聞今更わが功名と世よわけたる忝さと悦びけり

○加藤主計頭清正小西攝津守行長各肥後半州と賜はりまゝ一揆起る

天草領の島にて一揆の勢ひ甚盛なり小西志岐は城を攻るるに天草木戸れ一揆の長天草民部後卷に押寄志岐の東の山に陣を清正は先陣山岡道阿彌岡田將監南部無右工門小野木織部瀧野三位莊林隼人森本義太夫段々よ進む清正鷲平次とまて先陣を見せしむるに歸らず又飯田覺兵衛とやられしに飯田見切て歸る平次只今軍始らん先よ進きて戦に逢んといふ飯田知らぬ事といふまじきよ先陣只今追立られん戦はわぬ場よあらずとて打つれて歸る清正いかよと問るゝ飯田先陣は今打負て敵追かゝ來らん二の勝の旗本ふいといぬ清正證をいかよと問ふ敵東の山に陣し地の利を得たりといひも果ぬよ先陣敗北して一揆まつしぐらよかゝり來る清正高き處より横合よ突てかゝる天草民部敗軍せまを三里計追討よまたり清正十文字の鎧を突折り七度鎧と合せ其勢よ乘じて志岐は城と攻落されけり清正の鎧は十文字ふて三日月の形なり志津は作なりしが突折て片鎌と成ま又を拾取て佛木坂



の神宮に納しとぞ鎗の鞘熊毛なりしと瘡煩人われば其毛一筋ぬた  
て戴かざるに忽落けるといひ傳ぬ朝鮮人は今も至る迄小兒の啼時鬼  
將軍來るといひて啼止けるとうやかばりの猛將類まれなる事なり  
○清正一揆と攻る時或夜森本義大夫清正の前にて軍評定せしと凡組  
討は力よよらずい心剛にて手きとたれば易き物なりと申と清正組打  
は危きもの也勇も誇る時の必ず仕損すべしと戒めらるぬ其翌日清正  
の眞先に森本馬を進る處も歩行者一人寄合たり森本聞ゆる馬の上  
手なれば敵と横さまあててひかりと飛下り立ち上からんとする敵  
を引組で頼て首ととる清正も向ひ夕部申せまに違ひ候哉といふば清  
正大も賞せられたり

○東照宮江戸よおはしませしに秀吉の使來りて朝鮮と伐るよよしと  
申と斯て一人書院においしませて深く思案の体も見えさせたまひけ  
る時本多正信御前近く出たれども御詞もなまやと有て正信殿の朝鮮

よ渡海有べきやと申せども猶默然とせさせたまぬと斯いふ事三度よ  
及びて後何事ぞうしませしに人や聞べき箱根をば誰も守らとべれと  
仰有しうば正信さていといく御思慮定まりけるといひて退出しけり

○朝鮮と伐るよ時關東の諸將も兵を出さる伊達政宗の遠國たる故に  
騎兵三十騎鉄炮百挺鎗百本と軍配と定先くれけるとよ千ばりの士卒  
を引具し天正十九年正月九日岩出山と打立二月十三日京も着小西加  
藤は先陣たり岐阜中納言秀信と始として關東の諸將師を出さる其道  
は聚樂より戻橋を大宮も押通る政宗は旗三十本紺地も金の丸付たる  
具足着て弓鉄炮の者も同一出立も銀のれし付の刀脇差金のとがり笠  
をかぶり馬上三十人黒ゆるも金の半月の出え豹の皮又の孔雀の尾熊  
の皮いろくは馬甲うけ金ののり付の刀脇差ゆたりもかやく計な  
る中も遠藤文七郎原田左馬介のはき添も木太刀を一丈ばかりに作  
り帶たりまが鞘尻のさがりければ金具と真中も設けて糸と結び肩よ



かけて馬に乗たりける見物の群衆政宗の軍兵押通る時目と驚かそ出立なれば一同よめよ死せよ死せよと死せよとぞ

明の援兵朝鮮に來り平壤へいりやうに有て練光亭れんくわうていより日本の兵と望まよ江上よ往來する者大劔と荷ふ日光下り射て電の如し是の眞の劔よ移らず白蠟と沃ぎたる物なりといふ事懲悲録のまゐるせし伊達家の二士の木劔の事よや

○朝鮮南大門の軍の文祿二年正月廿六日の事也明の援兵鴨綠江あひろをわたり押來る小西行長かなはず引退く時に小早川隆景の開城府に止り一軍せんと待かたりたり浮田秀家使と以て疾都城ふ引返して一所よ軍あるべしと申されしうども隆景吾日本と打立より異國に討死せんとおもひ設たり年老ひひぬ今生の思ひ出ふ異國の大軍よかけ合せ大國の耳目と驚おす軍して屍と戰場よさらさんと存る所也とて引取ん氣色なかりければ又大谷吉隆と遣して誠よ雙なき志し古庭の名將も是

よの過じさればとて二萬計の兵よて大軍に取巻れ空しく討死ゆらん事口惜くひ只疾都城に入て日本の軍の先陣せられいへとなりまうば隆景さらば日本の先陣の隆景仕らうするにてい人お先陣をばかけさせしとて黒田長政久留米秀包打連て都城よ歸らましが南大門の外碧蹄館あひつぐんよ陳せられけり廿六日の曙あけぼのよ李如松が軍押來る旌旗を立けり糸何十萬とも測るべかかず秀家と始として大軍よ野合の合戦危からん都城よ楯籠ふんといひれし時立花宗茂目と見出し刀の柄よ手よかり敵よいければとて逃まもるやうやい只馳合せ蹴散けりちりしいん物よと勇まれしかば去ば誰り先陣せんといふよ隆景吾先陣せんと兼ていひつる事よ誰人にても恐れ思ひもよふすとて順て陣と進めらる士大將粟屋四郎兵衛村上彈正野島掃部のり三千計とめきさきとんで相戦ふ立花宗茂久留米秀包のり毛利元康六千餘り騎兵となり右の方三町餘りよ陣せしが横様よりくる隆景旗本一萬餘と率して一文字に切て掛り忽敵を討破



り首數多得られたり宗茂取たる首二ツ鞍の四方手も付け隆景は方よ  
來られまを見て取敢ず見事おいといはれまかば宗茂毎も仕るよてい  
と答へられけり此軍いまだ始らざりま時黒田長政唯一騎歩の士六七  
人召具し隆景の旗本も來る隆景よくま來られい先陣の粟屋も力  
を添たまへと言れに長政悦びの色面にあらはれて承りいどて先陣  
に向はれけり殊も寒風はげしう吹たりたれば長政大綿帽子と被られ  
しが先陣も行てばうしをぬいで世に聞えける水牛の冑の緒をべられ  
けり隆景の軍兵も是と見てけぬ軍も勝たりと勇まるとかや長  
政ことま廿五才武勇とかく人も信せらるゝ事なまゝいあざざり  
けり

或説に漢南よて明は援兵大軍なりと聞えまうば諸將評定して吉川  
元春と先陣とと元春勇猛の名高き故なり元春軍兵と後面にして敵  
を見せず敵近く成ける時士大將某焼飯と十ばかり持來りて時よる

しぐ候さまま先され候へといぬ元春是を五ツ食し士大將二ツ食し  
て残りも近習れ者も與へたれども得くはずとかや敵合二町ばかり  
に成ける時元春下知して一同も向直りそのさず突かゝり敵と追崩  
して頓て引取られけりといへり目に餘る大軍も逢て士卒氣と奪は  
れ見崩れまべきうと元春おもひてかくせまたりと也是誠に味方  
は氣と挫まめざる將略もして元春は關西無双の勇將たる事誰か非  
間まべきされども元春の朝鮮陣より前も死去ありまかば隆景かく  
せられたりしを傳へ誤りたふんも知べかたず

○南大門の軍も明は兵を追かけ秀家の土國富源右工門とて剛は者大  
力なりしがさいやかまよるふたる敵に追付て三尺餘ある刀と取のべ三  
刀まで斬たれども甲堅くて手も負ず國富刀と捨飛かゝり引組たるに  
彼敵國富と取て押へたりは糸返さんとするよ大磐石と横たへたるが  
如き國富脇差を抽て二刀させまといかなる甲にや少しも通らず已



お危うりま時味方數十人落合て敵とば討取たり

○朝鮮よて秀家と始都城よ在しよ加藤清正進て行程數日と隔つ諸將  
糧尽んとする時加藤遠江守光泰獨云清正都城と放れて敵よ向ぬ人々  
都城よ去て食に就んとせば清正と捨殺とべし今爰を去るもれい復男子  
の交いならし清正と捨ん事日本の耻なりといふ人々糧既よ尽たりい  
かよせんといひれしうば遠江守怒て砂と喰んものをといふ砂いくは  
れじといへば遠江守居丈高に成て汝等砂と喰ん様もしらじ我教ふべ  
きとて福島正則をきつと見ていかに市松いけの間よ大さよ成たるぞ  
やとて又秀家お向て今までの中納言殿と敬ひ申たりきりふよりの中  
納言先と申べし清正を捨殺し耻と異國よさらと人々なりといひとて  
座と立處に清正糧尽て都城よ引退き三里計の近所に陣またりと告  
來れり遠江守の清正と生死と同じくせんとをもへるに免がれけり  
○朝鮮の平安川の深さ八九尋四五石積の船の往來有て日本にてい

見ざる大川なれば川の廣さと諸家れ士或り七八町十町或り十二三町

雅名六之介後登  
岐此時六郎大夫

あふんといへども審ならず黒田長政の士吉田六郎大夫  
とい又助父子よ見積候へと下知せらる箇様の事よ慣す候ゆる覺束な  
いと辞それば父子が組に功者も有べしといひれて翌朝又助組の士と  
引具し川岸に出川の向に朝鮮人三人見えたり又助小柳權七こやぎけんの長高ながたか  
者なりあの向の人退るざる内に急ぎ堤の上と行へし指物をぬる時踏  
とまれと言舎先權七走行に其たけ向の人とひとしく見ゆるとき指物  
を振たれば立止りぬ即其間と打てまれば八町五段なり長政聞て又助  
廿一才老功れ者よも劣らじと稱美せられけり  
○朝鮮よて何れの所よてか有けん清正の陣大山の麓かきもとなりけるよ虎夜  
來りて馬と中よ引さげ虎落の上と飛出けり清正口惜き事なりと怒ら  
れけるに小性上月左膳さつきづなとも虎來て啜殺くわくころせり清正夜明ると山と取巻て  
虎と狩たるに一疋の虎生茂りたる萱原とかさりけ清正を目かけて來



る清正大なる岩の上に在て鉄炮を持締らはるゝ其間三十間ばかり  
虎清正と睨にらみて立止る人々鉄炮と揃へて轉んとすると清正下知まて  
打せられず自折殺じせつさんとの志なり斯て虎間近く猛り來り口と開ひて  
飛とりくる處とうたれしし咽のどに打込うちこめらればるここ倒れ起上らんとせし  
うこども痛手なれば終お死しぬ

○清正朝鮮よて大川に打臨うちむ向の岸の船を繋つぎ陸に陣屋有て旗を立  
たると見て恠おれと見よみ鴨岸が添そて泛うみたるは敵はなきぞかか誰たりあ  
る水練みれ者のわの船取來をと下知せられしに果して清正の言のとと又  
清の陣所に練あなくて馬秣まよくるしし然しかり清正をあまかか切て豆ま  
まじへて飼かるといはれしし馬は力落ちざりたり

○明の援兵大軍よて朝鮮よ來り日本の軍危しと太閤さかれ軍評定有  
し時蒲生氏郷進まし出何程の事かかいべき氏郷に朝鮮を賜たまひりしへば切  
取とりて打破るべべたもののといはれしかば太閤は是より氏郷の大志有

を思おもふくくたままぬ又同時隆景使を以て隆景が存する所の十萬の軍兵  
渡海せば城々と守らせ隆景先陣を明朝に押入おし北京を攻落とべし此  
旨申せと申て候いぬ秀吉小早川の智謀をぞあらん人々よく聞れよ  
秀吉功をと遂つずして死しるも秀次と大將として明朝よ攻入をん時我魂  
魄たま雲を乘じて鉄の橋をつつれ唐土の奴原と一々に蹴けころまて捨すなんも  
のををむかまも柘榴をと嚙かんで火をとなせし者の有まと聞其小男の名を忘た  
りといいれしかば施薬院の秀成夫の北野は天神の御事をて候と申そ  
秀吉それぞかし雷をなりて天に上りまと言傳ふれと吾陰囊の垢ははと  
もあらぬ物をと大音にいいれまを聞人をとに驚おきけり

○黒田長政朝鮮の全義館を陣せられししある曉俄に騒おぎければ敵夜  
討うちや寄よると井樓を上られしし虎馬屋を入いたるよてぞ有ける恐れ  
て出る者もなかりしし菅政利刀を提たて走り向ふ虎咆をううる處を飛とり  
へて腰骨をと深く斬付たり虎前足をて立たりがり愈い猛りて危あかりし處に



後藤基次かけ來り肩さきと乳の下かけて切りくれば管得たりやと虎の眉間を切割て殺しぬ長政汝等の先陣の士大將として下知する身あるも獸と勇を争ふ事おとなげなるとぞいひれける政利が刀は林羅山銘を作て南山と名く周處白額虎の故事なり銘は曰

節彼南山山惟劍銑。苛政除去。酷吏逃藏。截邪斬佞。惟刀在箱。惟其言虎。若有真偽。傳之萬世。爲子孫常。

朝鮮機張にて長政虎狩せられし虎一匹人の群たる中にかけて來る菅六之介が足輕の肩を咬て後に擲また一人とも腕を咬て投倒しけるが六之介其日朱具を着たるをや目ふかけけん忽飛かよりしを菅二尺三寸有ける刀を抜て忽に切伏たり菅の家お持傳ふ備前吉次が作なりき大徳寺春菴和尚其刀は弊秦と名と付たを秦は虎狼の國と云え故はよそ羅山林子も銘と作られたりといふ一説あり

○文祿五年朝鮮よて泗川といふ處に城と構えたる時門脇の狭間と垣

見和泉守家純あけて切れと下知しけると長曾我部元親見て人の胸のたりより腰あたりを當て切たるころよけれと云和泉守下げたらば敵城内と規ぬべたといふ元親此門へ押よせ心よく内と見るやと城兵よどりたらば一支もとべさや上げて切ば敵の首は上と射べ死うと笑ひけるとぞ

○慶長二年朝鮮の番兵船數百艘をから島に置て日本の軍船を防ぐ諸將番船を乗取べき評定あり加藤左馬助嘉明目に餘る大軍と小勢をもて争か打勝べきといひれしがひそかよ手の者よ下知し五人十人船に乗番船のかたお漕向ふ嘉明法を背く者をもと打留よとて追々船を出されしがやと有て我押止すば止らじと言捨て船に乗漕出を河合庄大夫同庄次郎荻野作左工門うぎ懸の三介五人打乗て番船の中よ押入り三介船の何れと問ふ正中の本船よ着よと下知しやがて船よ乗移る敵其勢ひよ恐れ船底に入て劔と拔鎌と揃へて待りけたるよ嘉明少も



ためらはず飛込たれば従者なじりの残るべき續て飛入てなで切よし  
て本船を乗取たをば諸將も追續き船を押し來る既に鉄炮の薬に火  
移り焼船と乗取る者多々河合庄次郎の十六才なるが飛入とて海に飛  
込溺死と佃次郎兵衛加藤權七郎勝れたる功名せり嘉明一人の武勇  
て七月十六日白晝に押寄せ番船百廿艘一艘に五百人三百人乗組たる  
を僅の士卒よて悉く海に切沈たたるの古今に稀なる事どもなり秀吉  
威狀を與へ六萬二千石に増祿えて十萬石と與へらる池田家の長臣池  
田河内が妻の嘉明の女よて河内が男伊賀の外孫なり伊賀若死時外祖  
父に武功の事と尋ければ今の年老て過ゆる事皆忘れたりとのまひ  
て止ぬから島の船軍の事と問に十五六才なる小性の船に乘移る時矢  
に中り海に落ちて死なたり死不便の至り也と只此事と語りて他の事  
及ざりしとぞ

○太閤名護屋ふかりて朝鮮の軍はかくしうらぬと怒り諸大將と  
集え今の秀吉自ら押渡るべし三十萬の軍勢と三手あして利家氏郷に  
先陣させ三道より打破り真直に明朝に攻入るべし日本の事の徳川殿  
おはせば心よかゝる事なしいかよやおもふと有ければ東照宮聞し召  
利家氏郷に向いせたまひ人多き中より撰び出されて一方は大將た  
ん事面目よてあるに抑我等弓箭を取て年老ひかゝる時よ人の跡よ  
かゝる残りたらんは口惜き事なり必一方は先がを承へるべしと仰  
られけるお淺野彈正少弼長政進と出て暫くは殿下此年月の御振廻  
かゝる替りてあるに古狐の入替りたるも存る也と申も果ぬに太閤  
大に怒りや秀吉が心よ狐の入替りたる所謂岐と申せ申し損じなば  
首打落さんものにとにらまれたるも長政ちつとも騒がず長政が如死  
何十人が首刎られんも何條事のいへきそもくよしな死軍起して朝  
鮮八道の申にや及ぶ日本六十餘州に父を討せ兄弟と失ひ夫よ離れ子  
を先立歎き悲しむ者滿々たり夫よ兵糧の運送相加はり六十餘州の内



悉くゆれ野となる今發向ひひなんふの五畿七道盜賊發起せん事必然  
なり徳川殿いかも思召ひとも争か是と防ぎたまふべき爰と思し召て  
先陣どの仰いらん殿下むかしの御心ならんにい是れどの事なと御心  
付のなるべき是唯事にわらず一定古狐の入替りたるも候鄙き人の詞  
に人とりむととる髓の必ず人よとらるゝとい此事に候と憚る所なく  
申放てを大問何よもせよ已が主に斯雜言とるある奇怪なれとて飛り  
らんとしたまふを人々押隔たり長政のさらぬ体よて人々に色代  
て静み座を立て陣所お歸るかゝる所も肥後國に逆徒一揆を企つと聞  
えければ太閤大に驚き長政と召出ま汝が嫡子左京大夫幸長罷向て切  
静むべしと下知せらる本多中務大輔忠勝を添て肥後の國へぞ向られける  
○朝鮮よて何れの所の事よや廣死野に道ゆりて向ぬえ山の麓なるも  
大穴を構へ射手を伏置て行かゝる日本人餘多射殺しけり黒田家の兵  
井口與市が從者山崎喜藏いで参て見申さんといひもゆへず走り行井

口も馬より下り走入ければ山崎射手三人斬伏る井口續て攻入追散す  
井口恩賞も望候はずあられ朱柄の鎧免され候へといふ物もとも寄合  
て武功度重るか或い一日の中に道七ツ取時は朱柄の鎧もたすると申  
事の候輕々しく許まがたは事よやといふ井口是を聞其後一日に道七  
ツ取て朱柄の鎧もたせけり

○朝鮮にて清正全州に在る時釜山海より十里餘りの程日本の軍兵城  
々を守て七八里或は十里計にて伴の城と設りたり清正と太閤呼れま  
かば日本に歸るとて打立れけり戸田民部少輔高政密隅に有て清正と  
番友なきばもてなとべた用意して待れまが士大將眞鍋五郎左工門神  
谷平右工門と途中まで迎とと四里ばかり出れば清正の先陣見も其頃  
は四方に敵なく無事なり二人とも革羽織袴よて出たるも清正の軍兵  
皆物具まで食付け旗をはり立磨筒の鉄炮五百挺眞先よ押て鉄炮に  
火繩をはさみ火とけけたり清正の溜塗の物具銀の長烏帽子の冑の



緒とし先類當脚當して草鞋とはき銀の九本馬蘭の馬印と自ら背よさ  
し月毛の馬よ白泡かませて來まり二人馬より下て迎へけると清正見  
て民部よりの迎の使者骨折也早くそれへ着陣せん殊の外よ人々垢付  
ぬ風呂をたて下々まで湯と賜りなば大慶なふん此よ去疾歸りて申  
されよと詞を懸らる二人承り候とて馬よ乘急き歸りてかくといぬや  
どなく清正着陣せられ屏重門より入椽よて民部近習の士二人寄て清  
正のさといれし馬蘭を取て旗籠よ立る清正椽よ上らるればよりて草鞋  
の紐と解脚當の緒と解く時清正腰よ付たる緋曇子の袋と座敷へ投入  
たるにどうと落る米三升計よ味噌銀錢三百文入ふれたり馬印とさす  
よ腰のつり合是にて能と也民部驚て十里近きに敵もあくていうなる  
事ぞといぬば清正ものは大事と心得たるぞよき由斷大敵といぬ事ゆ  
り我物具せず身よ安じたくいねもへども左ゆらんにい皆懈るべし夫  
ゆをふ身の苦しけれども懈なき爲にかくはせえ也萬一此事あふん時

解りて事よ仕謀るならば今までの武功虚名よならむ事よ慮れば也凡  
上よ學ふ下とて大將甘げば下を大に怠るものなれば常々陣法を嚴よ  
とる事に候上一人の心下萬民に通ずるとかやいふ事の有よと答へら  
れけるとぞ

○朝鮮より虎と象とを引來る象の柔馴れもれなれば細に綱にて引け  
り虎よハ鉄の鎖と付け左右より七八人取付て引來る朝鮮渡海の諸將  
一旦名護屋よ歸集られし時彼虎よ大力の男もまた左右を鎖とひりる  
とゆといぬてかけ出し幾とも並居たる中と通りけるよ人よな驚死た  
るよ清正膝立直し拳と握り臂を張て虎ときゆとよらまれしよ虎もま  
ばし立とまりて清正を睨みて打過ぬ嘉明の壁よよりかくりて居眠  
して在しが虎通り過たる後も初に異ならずやよ有て目と開死何事に  
疑がれ候ぞ虎を引通れる故にやといと靜よいはれけり

○慶長二年二月清正再び朝鮮に渡りれに船の着たる所の北地よし



て寒風烈し土民ども土穴と穿ちて其中に住居し日本軍兵押渡ると聞逃走りかば清正の兵共土穴に入て臥す清正漫ふ民と殺さず非道と嚴ふ戒かば後より商人も物と馬に付て來賣り寒氣以外の外に甚しくて馬の毛よりらの下りてかゝ死に鳴る聲土穴の中聞えけるとかや王元美が詩に 風劈面疑裂凍粘髭有聲といゑるれもひ合されぬ軍兵晝の終日風砂の中も立夜の土穴に臥したる故皆雀目も成しと土民救て驚と食して愈けるとぞ

○朝鮮にて何れの所れ戦ふや清正の士大將森本義大夫流矢に臂と射させられたり斯る處に庄林隼人馳來るを見ていかか手負たり此矢抜てたまわれといふ庄林馬より下て抜て捨れば森本さても快死事かなといひもほへず馬をひかりと打乗一鞭打て何とかけ出し庄林殿積かれよと言捨て敵と逢首を得たり二人とも清正の士大將大剛の者なり森本が鎗の白鳥毛と鞘とし庄林の黒鳥毛と以て鞘とを世の人黒鳥毛

白鳥毛と云ふべし

○朝鮮より諸將連判の書と太閤に奉る時清正の花押殊ふ筆畫かざなりや隙入りくば福島正則冷笑ひて病重くなりて遺言の時の狀ありからんといわれしと清正我のさへ存せず戰場に屍とさらそともきたなく逃て梅の上と死んとは思ひ設けず候されば遺言狀何かま候べ死と答られしかば正則詞なりけり

○晉州の城と攻らるゝ時黒田長政の士大將後藤又兵衛基次龜の甲といふ車を作り出せり厚板け箱と拵へ内に強死切梁と設け石と落しかけても箱の推けざる手當を箱の内へ後藤入て棒と指車と箱に仕かけ進退自由と廻る様にして城隙へ押詰石垣を崩して乗入けり  
○慶長二年日本の軍復渡海し黒田長政の先陣栗山備後利安後藤又兵衛基次衣笠因幡母里但馬黒田宗右工門以下三千ばかり和軍館全義館に陣せし處に明に援兵押寄る其よし長政に告よとて書簡と書ける



利安見て敵かゝり候間早々に救いせたまへといひぬ詞やある書改めよ  
敵押寄せ候先陣の少しも心と勞せらるゝ事あるべからずとある申へ  
ければとて直させてを告たりける斯て敵寄來れば利安先陣して打破り  
たり長政聞とひとしく打出てもみよもんでかけ來られに敵早護龍  
臺とさして敗北しけり先利安が陣所入りて何とて軍とまたるやとい  
ひも終らぬよ利安目と見出し押寄る敵に辞退する事や候と申と長政  
汝等討死せば我生がひなまと思ひてかくえいひし也何とて疾告來ら  
ざるやといひれしうば傍より告申と書簡の詞を書改るとて遅かき  
と申す利安夫の臣が改させて候子細いまかゝ也たとへ疾救いせ候  
へと申とも行程隔りたれば無益なり敵の四萬ばかりも候はん味方  
必死と思ひ定て軍すべきにて候たとを屍と異國の野原よさすとも  
名は後の世も傳はるべし黒田が先陣に剛れ者をも大敵に取巻れ深く  
討死きたりと言れなん又とく救はせ候へと申さんには後日よ黒田が

者ども主君の援と待か糸皆打殺されたりと人に笑ひるべし是日本の  
武名を穢そよの候えずや弓箭取身はかりよも名ある惜候ゑ且の今生  
の暇乞と存じて告奉る書簡殊更に改め申きと申ければ長政大に悦ば  
れけり

○利安若き時の善助といひ中頃の四郎兵衛といひぬ長政は筑前を賜り  
し時名島の城よ長政居て左右良け城に利安と置れけり祿一万五千石  
極えて儉ある人なま人の衣服の美麗なると見てを褒贈といふ事の有  
といひ教へ又價高く馬と購ふ者わればさばかりの馬も二疋の用とば  
なさと何とて無益の費するぞと戒めけりされども事に臨て金銀と惜  
むの心な一従者といたり憐と貧乏と助ると尋常の人に大に踰まさ  
れけり

日根野備中守朝鮮に使としてゆく時黒田如水に銀とかり歸りて後  
如水れもとよ行しよ如水近習れ士に先に人の贈り玄鯛を三ツに



て其骨と煮てもてあしひへといひしかば客齋のはなはだしき事よ  
どおもひ居たり頓つらて肴と出ま酒宴ありし後彼借たる銀百枚取出し  
返せしお如水はじ先より返したまひふんとれ心よてかもしひのす異  
國に渡らるゝにより懸たのまれまかば送を参らせしなりとて受取ずして  
止ぬ栗山も如水の風に習ひたるにや君臣ともに頼母しき事ぞか  
栗山の戒ともて總て世の有様と見るよ士といはるゝ人の体あそ  
無下むげよくちれしけれ多くの美衣と着かざり明暮酒宴あけくれして馬具武具  
様の物いかよ有やらんまらず多くの商家も典當し或は茶の湯よと  
て古びかけたる器の何の用もなき物に數金を費し博奕とてあらぬ  
戯に夜と明を斯ばかり無二ふいひかひしけん人の黄金と奪ひて其  
人の赤裸になるも願はず是れそも盜賊の心にも劣りてたるとなる  
べし扱物がたりするを聞ば多くは女色のたぬぬれとのまよて禮義  
廉耻の露ばかりもしらす又或は儉約けんやくに事よせて利倍の事には錐刀  
の末とも争ひ人と欺きて已が得あふん事と願ひ或は奢侈しやうぎよぬり  
て用度よ苦しと商人お向て遣とたれ其人の恩と得て金銀とかり是  
と耻ともせず門を出れば従者あまた召具し我は門地のまかゝ也  
とて途中にて人と追拂ひし先家人を飢し先て購ひたる價とやらす  
大國れ君も亦大かた斯の如ま不仁不義の行となえて世の人の誹笑  
も知らず世界の皆かくなるよとおもへば風俗の衰へ無下に口踏死  
事なり



常山紀談

卷之十一十二

東 京 圖 書 館

和書門

雜  
皮  
類

二  
八  
函

七  
五  
架

二  
七  
九  
號

一  
〇  
冊



東周館

常山紀談卷之十一目次

竹中重治 心掛の事

松澤某 信を撃んどせし事

久世三四郎 坂部三十郎物見の事

野々口 助物語の事

石谷定清 御供よ恭る事

坪内玄蕃 心得の事

一 道化清十郎 平野與兵衛よ對面の事

一 谷太郎 左衛門物前心得の事

一 可兒才藏が事

一 石田三成が事

一 關白秀次 公生害の事附吉田修理が事

一 木村常陸助 最後の事



- 一 秀吉有岡城へ使者お行れし事附河原林越後山脇源大夫が事
- 一 成田助九郎誅せらるゝ事
- 一 秀吉公連歌の事
- 一 三木牛之助鍬形の詩歌の事
- 一 谷大膳武勇討死の事
- 一 戸川肥後守秀吉公と負隘事
- 一 黒田如水先見の事
- 一 秀康卿伏見にて妓女國が舞と見たまひし事
- 一 直江兼續が事
- 一 石田三成直江兼續密謀の事
- 一 兼續惺齋先生に逢ふ事
- 一 石田が黨 東照宮と謀奉らんとせし事
- 一 細川忠興忠告の事

常山紀談卷之十一

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○竹中重治（ちかたけ）日分よ過たる價と以て馬と購（かひ）ふべうらす其馬に乗たる時能き敵と見かた追詰て飛下りんと思ふか或は又鎗を合せんと下り立時馬副（うまのたもと）の人の續（つづ）かされば此馬人の物も成るべし又かゝる馬の得がたしと思ふ心出て期と延（のち）そとあり此能馬ゆゑに却て名と失ふともあるべしかせ士の金十兩よて馬と購んとするも五兩にて求むべしとまげもなく飛下り乗放ちて能き時の捨もとべしさて五兩金よて又馬と求むべし馬にうぎらず此心得有べたなり身とも義もよりて捨るぞかしまして財寶（さいぼう）とや塵芥とも思はぬ心掛常に有べきころ士の本意あれどぞ北條家の底（そこ）と預りし諏訪部といふ者度々功名あり何れの時の軍にや勝田八左工門といふ者と二人物見よ出る敵不意よ出てけけまたよ二騎引取る時諏訪部の馬と預るゆる勝れたる馬よ乗たる故乗切



て馳歸る勝田の獲れたり敵追詰たれば下立て相戦ふ味方助來れば  
勝田打伏し頭半切れたり敵引取たるも勝田助らじと思ふ勝田手  
にて頭と持上げ未だ死せざるも人々のそと歸るやといふを聞て  
助けて歸りけり勝田も度々れ功名ゆり後松平右衛門大夫も仕をけ  
り○竹中が論尤も士たる者の知るべき處なり弓箭取身の朝夕も軍  
旅のと論せんともあらまやしきと也さらすば必ず天の冥加も尽べ  
たなも戰國お生れ名人を其事も臨て功有て祿と得たるにてこそあ  
れ今泰平の時も生れ父祖の蔭もて祿と世々もとるは天より士の職  
と命せられたるなり天より命せられたる其任を忘れなんふり天の  
冥加に盡んと必定なり又天下の四民の上もありて下と鎮る職ある  
ろかにせん口惜うるべきともある

○謙信の時に岑澤某といふ士罪ありて放斥せられしも越中の椎名も  
奉公し謙信越中へ師と出されし時彼士戮らにかくれ鉄炮と持て伺ひ

居たりしが俄に鉄炮と傍も投捨て泣居たり謙信見出まていかも岑澤  
免づらしといわれしよさばりの仁君智將を打奉らんと存せしと悔  
しく成てゆ今遙も見奉りて先も屋形の心も背き又かゝる設けと工を  
申と此上もなき大罪もて疾々首と刎らるべしといひて伏ければ謙  
信打笑ひ吾も智仁との相應せざる虚名なり疾馳歸りて椎名によく仕  
へよといはれまかともかの士越後も歸りて農夫と成て一生を終りた  
りとかや

○東照宮何れは時の軍にや久世三四郎宣廣坂部三十郎廣勝二人と物見  
も出したまふ坂部の勇める色ゆり久世の氣色甚惡ふ見へしかば側よ  
り笑臉人の有しよ東照宮坂部の天性の剛の者なり久世が及ぶべ  
よあらずされども久世の人よ劣りて生甲斐なしと思ひ定めたる者也  
其故も辨てはげむゆゑ心を勞して其けしは顯れて見ゆ今見よ久世の  
坂部よりも敵近く進み行て見て歸らむ物と仰ける處に二人歸り參



たるが果えて御詞のごとくなりたり 東照宮坂部の生得の勇と頼  
よして懈りあり久世の勵むともて味ひ深まど感せさせたまひけり  
○明智光秀が土野々口彦助山中鹿之介お逢て功名せんと問鹿之助  
物前よの必ず目の明ぬもれ也能心得られよといぬ彦助させるとも  
おもはず其後何きの戦よや川際よ野々口打出たる處よ朝霧たなびけ  
て物色見え分ず時に山中が教へーとと思ひ出し手綱とひかへ爰よて  
目が見えぬといひしに吾後をたるなふんと目とぬさき心と静先て目  
と開きたるふ川の半よ物具したる武者大差物を指て只一騎渡り來る  
と見付て心もさのやかに目も明かよ成たれば押並べて引組でれち首  
を取たり後に彦助これも我眞實の功名よのあらじ彼敵大さし物よ身  
の疲れて輒く我お組敷れたるならん彼敵も物前に目が見えざりゆら  
んと語どき

○石谷十藏定清の先祖遠江石谷村の人なり大坂御出陣の時江戸よ殘

させたまひに御跡より從者一人よ具足箱と背に負せ自ら鎗と荷ひ  
て潛に江戸を出陣府よて追付奉りけりゆ終て心易かり御近習の人  
またより江戸に残り申事口惜く存じ重き御法を破りて參りぬ首を刎  
られん事の素よ覺悟したる事なればいかお御咎め蒙らんとも露ば  
かりも悔むとは候はずと申上てたまひ候へといひまうば將軍よは  
殊よ法制と嚴お思召たまぬなれば争か御ゆるされの有べきもし御宥  
らんにお御あつより引ゆきて追々に來るべければ必ず烈しき刑よ  
行のれなんされども捨置べたとならねばうくと申そに 台徳院殿黙  
しておのしまと十藏の既よがと聞えける上り今夜か明朝は首と刎  
られなんど相待居なりしに十藏よべとて召れけり思ひ極て進出れば  
如何まて法と破りたるやにくき奴かな切て棄ばよと思へども若き者  
なればゆるそよと仰出されて黄金二枚賜りけり扱江戸への重給て  
誰人にもあれ一人も忍びて御供に參りたらば重罪たるべしと固く仰



出されたるとなり

○石谷十藏定清坪内玄蕃に向て度々の功名世に高しあの心を掛よて功名と遂べき道もゆふば教へられよといふ坪内聞てよくあろ問れたれ人々事に臨て神の力と頼み八幡々々といふ我も又頼ての相だのとなりて成就せじとおもふより我の毎も八幡といふ神と刺通さんど一筋と思ひて後れと取ざりしといひけるとぞ

○道化清十郎の美濃の人にて信長に仕へて度々武功勝れたる故も信長清十郎が指物に無双道化といふ四字と書て與へられしかば世人無双道化といへり平野與兵衛の齋藤家士なるが是も武功譽れ高く信長是と招きし時人々往て平野と對面するに道化も打連て物語せしが道化いはく御身のうらるも先立引も殿ると聞其趣と委しく語て教へられよといへば平野さらに心懸故にも候はず齋藤家に冥加に叶ふ士の皆々討死しり吾生残りて重てれ軍にの必死と思ひひれども武

勇れ不足也ゑる死と遣れ今日の間もゆひ耻の上の耻あひ候と答へければ只今の答至極の道理よて候先がけ後殿の必死を志さすしての成がたしと大に譽て感じけり

○谷太郎右衛門の武功の士にて黒田家と客の會釋ほて招き置れけり谷が曰軍の場よて先敵より味方と氣を付べし一人先も進出踏よたゆる處も跡より二人三人行重らば始出たる者と強と知るべし其所へ行べからず吾は又別の所に獨踏出まてあたへ居るべく志せよまばらくすれば又其所へ味方つくぞかし又日頃心安き人のわが主君に寵愛せらるるとも軍場にて其人にかたはらに寄べからず必獨立の心得をべし又士の弓鉄炮の上手といひる事好む事にあらず敵と打立たき時り或の城へ射込た死事のゆふんも足輕は進めがたき故も人よさして命のあらん時射あてざれば面目なし危き場は敵も堅く守る故も多くは犬死する事ありといひり



○可兒才藏吉長の尾州可兒山の人にて大剛の者あり篠と指物にす  
 と取て篠の葉を口中に押込投棄て後の證としけるゆゑ世の人篠の才  
 藏といひ傳ふ關白秀次に仕ゑ長久手の軍に秀次引退れしに岡本嘉介  
 村善右工門等踏止まりて支ゑしに才藏が來るを見て山に寄りける心  
 地せしと也さて才藏殿の何方よぞと問て其退れたる方へ行けり目  
 の敵と見捨て引退しは聞えよも似ぬ才藏りなど論じけるが或日聚樂  
 にて語り出えて才藏にいかなる所存ありやと問才藏はとて何心な  
 く殿の跡と慕ひたるばかり也き今人々の論と聞え尤なりさらば暇申  
 そとて宿へも歸らず直に立去り後福島正則招て七百五十石の祿  
 と與へらる才藏が下人久右工門といぬ剛の者あり才藏その祿の半  
 分とゆたへ竹内久右工門といぬ才藏が墓藝州廣島に在といへり  
 ○石田治部少輔三成の近江國石田村の百姓佐五右衛門といぬ者の子  
 よしていとけなかりし時佐吉といひしが家貧き近き邊りの寺にや

りて在けり或時秀吉彼寺に行き佐吉が明敏なる故呼出して側に仕ゑ  
 しが頻に祿を増し水口四萬石與へられける後三成に人數多招きたら  
 んと問れしに島左近一人呼出えしと申て秀吉これに世に聞ゆる者也  
 汝が許し小祿にていかで奉公すべしといはれしかば三成祿の半分と  
 分ち二万石與ゑしと答ぬ秀吉聞て君臣は祿相同といぬはむかしより  
 聞も傳へずいかさまよも其志なからぬよも汝の仕へしゆゑしくも  
 計ひたるかなと深く感せられ島と呼出して手づから羽織と與ゑて是  
 より三成に能く心と合せよといはれけり三成佐和山と賜りたる時  
 島に祿増與ゑべきよしいひけれども祿更不足よも候はず他の人々  
 に賜り候へと辞したり左近が父もと室町將軍家に仕へ江州高宮に  
 傍みかひなきさまにて隠れ居たりと三成招き出しけり  
 ○秀吉秀次を養ひ關白と譲り夫より太閤と申す文祿二年秀頼誕生  
 り秀次よらぬ事どもさまく有ければ文祿四年七月八日三成太閤



の前に出て關白の謀叛謀叛既にあらわれしとて證と正したる書と見せ申せば太閤怒て宮部善祥坊堀尾吉晴等も下知えて疾伏見も來らるる一先高野も退き申ひふきあるか二ツの中よと云送られしかば秀次畏り承り候とて其後粟野木工頭秀用白江備後守成定熊谷大膳亮直澄三人も此といひ有べれと問るるよ白江聞もあへず殿下只今聚樂と出たまひん事然るべからず候此三人の中一人伏見へ参りて犯さぬ罪と申開くべしかないで討手來らば防矢射て思召定免られん外他あふんやと申そ熊谷此謀尤さる事なまども帝都帝都の騒さわぎとならん事其恐あきよあらずまた謀叛人といひれんも口惜かるべし父子の禮義なれば都と出て東坂本も趣まはに讒者讒者を糺されん事と申すべし御許されなくば唐崎濱に打出て勝負を決するの外道なしとぞ申ける粟野只今危きに逼りて宥ゆるを請こども聞入れふまじ迎むかも遁のがれぬ所なれば今夜伏見も押寄て屍を城よさらすべし婦人のくびれて死るが如くなふんの口惜き事なり

と申けれども秀次をな用すして高野山に趣まはにけるが

一説に吉田修理此時申けるは謀叛眞實よかはまさまさば人数一萬我も付られ候を今夜伏見も夜討して只一時も城と乗破るべしといひけれども聞入ざりしと也修理後に越前秀康卿も仕へ大坂陣に忠直の供して先陣たり五月五日天王寺口の御先手加賀利常も命せられまうば忠直甚怒られま時本多伊豆守然らば明日眞先かけて加賀軍兵と踏ふみこえれども儘なる軍せんかゝる事の吉田修理よく決斷けつだんする者もて候とて呼出す修理聞もあへず夜も短たかく候早支度して打立べし人々續かれよと言捨て已が陣所も歸ると否やひたくと物具も先がけて加賀の軍兵の押行所も修理馬も乗寄せ今度れ命も岡山表も加賀天王寺表も越前の三河守先陣を承りたり各はまらざるやと言もあへず眞一文字も押破りかけ抜たれば越前の軍兵れし何とく修理は今日必死と思ひ定免ければ本多忠朝たけともの陣も鉄炮を



打のくるとひとしく死やくと聲々に呼ひり眞田が陣を切崩し北  
る敵と追かけ天満川の深きに馬と乗入れ溺死しけるとぞ  
青巖寺にて自害ありかの三人も所々にて自害せり是三成太閤は後  
世とくひがへとべたれたる先關白と失ひけると後よぞ人申々る  
○關白秀次高野の青巖寺にて自害ありければ事と司り寵愛せられし  
人々所々にて誅せられ自害しける中に木村常陸介師春檢使の松田勝  
右工門は向ひ今度關白聚樂と出て伏見に趣かせたまひんと定められ  
し時師春申ぬるに太閤御對面だまひりまささんよの讒者れを明  
らめたまひんされども夫までもなく中途より遠國へ放流せられたま  
ぬか甲斐なく御身と白刃に伏たまひん必二ツは間なるべしあられ太  
閤の使者と斬て捨諸將の妻子聚樂あると人質に取罪な死事を申開  
かせたまぬべしさもわらんには和睦も堅く定まり又戦も勇名と遠  
とべり空しく聚樂と出させたまぬ様や有べきと再三諫先申ければも

吾太閤に敵する心なしとて承引ひのざり然らば關白も於て異心ま  
ままさる事明か也此旨と達してたまひりなば其恩黄泉の下にも忘  
るべうらずと云置けると松田折と得て秀吉に申ければ太閤本意が志  
を懸て妻子も米百石と與へて京都誓願寺の近所は住居せしとぞ  
○秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に来る村重が土河原林  
越後守治冬猿丸がつらたましひ遂にあだとなすべま今刺殺さん事易  
からんと村重にささやきけれども村重聞入す此事と秀吉も語りけれ  
ば秀吉治冬と呼出して懸詞とつけさしたる脇指を抜て引出物おど  
したりける村重指替のあくてといへば秀吉吾刀一ツと頼て信長お  
奉公する者も非ずといひをけり後秀吉世と平げて治冬と深く惡とさ  
がし出して殺されたるに治冬君の爲に其仇を除くは武士の常の事な  
り秀吉舊き怨を忘れず無道也といひて死したりたり

秀吉河原林に與ゑられし脇指の三條吉廣が作也河原林が舊友山脇



源大夫重信も傳へたり山脇の攝州の人幼うりしより勇名の聞えあり  
甲州も往て内藤修理が許あり其後攝州に歸り荒木攝津守村重も仕  
へ頼に用ひられて長臣たり村重神田伊賀守と軍の時神田が軍奉行郡  
兵大夫の勝れし剛の者なるも毛付して討取たり凡首數九十八取て首  
供養三度せしと也荒木亡て重信中川清秀の許に隠れ居たり清秀の妻  
は重信が伯母也前田利家柴田勝家丹羽長秀一萬石をもて招かれしか  
ども引籠り居たりしを護國公池田信輝公懇に招かせたまひまかば來仕へ  
山崎合戦に明智が士大將丹波國よてあら山といひける城を預り居た  
る村上源之丞と馬上にて鎗を合と山脇が鎗の十文字にて村上が馬の  
頼み流付馬飛出ければ源之丞馬より落けると從者うけ來り助ると  
源大夫詞をかり村上と引組ける所と味方數多から合て村上が首と  
得たり其後も功名有て士三十騎の將たり

○秀吉北國も趣きし時丹羽長重の小松の城も立寄たるも長重の士成

田助九郎といぬ者あり秀吉先殿と北陸道の管領もせんと志津が獄  
にて約束ありゆるが加賀二郡越前若狹と賜りぬ先殿遇させたまひて  
後小松十二万石も滅じ既に滅亡も近しとも申べし秀吉の不義憎むも  
餘りあり臣も討手仰付くもたもと輒く刺殺すべしといひければ長重聞  
入ずしてさて止むたるを秀吉いうもして洩聞れけん大に怒て成田と  
憎む事甚しかりければ成田小松と退て伊勢の朝熊に隠れ居たりしと  
終に搦し出して殺されけり成田が子半左工門長重も仕へて小松の軍  
に戦功あり

○秀吉或時細巴に向ひ吾を殺せん汝脇を殺せよとて

真山もみじふとわけなく笠とせられしよ

まかとも見えぬ燈火れりげ 脇細巴の句なり

細巴笠の鳴虫にひのすど申秀吉聞て笠も聲なくとも吾なりせんと思  
は鳴すしてや有べきといひぬれま時細川幽齋かたへより



武藏野やまのとりか終てぬる雨に螢より外あく虫もなし  
とよめる歌のいはいはれければ秀吉惚ばれけり

此歌は螢の聲ゆりといぬ心よのほらす雨降る夜の皆虫の鳴止なれば光の見ゆる螢より外虫な十といふ事なり

○三木牛之助の畠山高政はたけたかも仕へて剛け者也五尺ばかりの鐵形打たる  
胃と着て運在天見敵無退なげまた人の只さし出ぬこそよかりけれ軍よ  
だよも先がげをせばとよ先る歌を鐵形も書たりしが天文十一年正月  
河内の合戦よ一番鎗と合せ敵は大将と討取たり天文十六年七月廿三  
日三好政勝入道宗三と舍利寺の軍よ討死しけり後此歌のとよ秀吉に  
物語せる人有れば秀吉歌の趣意よろしからず吾なれば人はたゞさ  
し出るこそよけりけれ軍の時も先がげをしてとよひべき物といひ  
れけり

○天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時谷大膳は浪手の大将た  
り兼て大膳は宿騎にと秀吉望まれしかども信長ゆるされずして加勢  
たらしめらる大膳敵三騎と馬上よて鎗を合せ皆討取たり秀吉疾かさ  
の丸の出丸を攻られよといはば大膳城堅固にして容易に攻取がたしと  
答ふ秀吉日頃勇名高き大膳小城一ツ破りか終たるやと詞とかけらと  
ければ大膳も怒り秀吉も既よ刀の柄つかよ手を懸べ死色なりまかば竹中  
半兵衛立ふさがり戰場は勝負よ力を尽すべきよいかなる事ぞとい  
ふ所に蜂須賀彦右工門も來りて秀吉が誓ちかと取て押返を夜よ入て秀吉  
酒肴を持せて大膳が陣屋に至りけふの武功拔群なり先の問答の我過  
よて後悔大方なとすとて懇情甚し其後大膳手勢と率てかさの丸へ攻  
かふる城中もまよと大事と防ぎ矢石と打出せども大膳少しもひるま  
ず士五十騎歩卒二百ばかり一の城戸口を押破りたれば手負死人數と  
しらす寄手押ゆれば大膳念なく乗破りたるが數ヶ所手と負て踞居  
たる所に法師武者むしやう狸々皮の羽織着たるが引返えて大膳に向ぬ大膳吾



疲れたり近寄て首と取て高名ふせよと云とさう走りて一太刀打  
け大膳敵の草摺を取て引よせ脇指と抽て刺貫く處も別所が士大將由  
井小兵衛と名乗て引返して馳來り大膳を一太刀斬たりかゝる處を大  
膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄てたゞとて由井を打て芝居  
打居押へて首を取て父に向へば大膳は息絶たり出羽父の死骸と陣  
屋も入れ取たる首を秀吉の實檢も備ふ秀吉大膳が討死せし由と聞て  
せめて死ふなりとも死骸ふなり共對面せんとして陣屋も行き惜き人と  
討せけるよとて涙もむせばれけり

秀吉家譜に載たるは大に異なり然れども此一條は谷の家も傳へた  
る説なる由あれば家譜の誤なるべし大膳を江州犬上郡の人信長に  
仕ゑて川尻肥後守稻葉伊豫守と同じく軍の評定の人も加へたる十  
四才より四十七才まで鎗を合する事九度首を取事十七度なり

○浮田秀家伏見よて秀吉を饗えける時廊下より行く處は白砂の上よ

戸川花房と始として並び居て拜謁と秀吉戸川達安お吾とれたるといひ  
れしかば戸川秀吉どかきおふて書院にゆきたり秀吉かゝるふるまひ  
多うりけれは其よりして古き家々の禮儀も多く失ひたるにぞ

○秀吉病重かりしかを朝鮮渡海の軍兵を引取んと計られける時朝鮮  
へは必徳川殿赴らせたまふべしさらば日本の自ら徳川殿も歸服とべ  
しと人々いひし處に思の外も秀吉石田三成も命せられて朝鮮も赴き  
けりさては日本は權威の三成に歸とべといひふらも黒田如水獨是  
を然りとせず朝鮮の事三成是を承るにより日本の徳川殿の掌の中  
もありと覺ゆ三成是より伐りて人は是を嫉みなん然らば徳川殿の仁徳  
に靡き従ひて日本の自然と徳川殿に歸服せんといはれしが果て然  
りた

○越前の秀康卿伏見よて國といぬ妓女と召て舞せられし時襟にかけ  
たる水晶の珠數見苦したとして物具の上よかけたまふ珊瑚の珠數と賜



ひりたるがしばし舞たる時頻と涙と流したまふ人々怪しみければ秀  
康卿今天下に幾千萬の女ゆれども天下一の女と世も譽られ名高き  
此女なり吾天下第一の男と世もいはれおわれば女にさへ劣り果たると  
思へば泣れけると仰有けり

○越後の士大將直江山城守兼續の朝日將軍義仲の孔子樋口次郎兼光  
が末孫なり謙信に仕へて景勝に至る景勝奥州にて百萬石を賜りま時  
米澤三十萬石と直江と與ゑられ倍臣の中第一の大祿也長高く容儀骨  
柄双なく辨舌明かかみ殊更大膽なる人なり且文藝にも暗かみ五臣  
注れ文選の此人板行させたと也詩とも作りて

春雁似吾吾似雁洛陽城裏背花歸なといぬ句も世もたふえけ  
り伏見れ城よて諸大名幾等も並居たる中伊達政宗懐中より金銀取  
出して人々に見せられしは其頃金銀の始りし頃よて珍しとてはやさ  
る直江が末座も有しをまね見られよと有し時直江扇の上も金銀と置

て打返し女童のは糸ひくやうよして親しかば政宗いや苦うも候れ  
手も取れよと言も終らぬ直江謙信の時より先陣の下知して慶取候  
手もかゝる賤き物とれば汚れ候ゆる扇に載て候とて政宗のうたよ投  
戻しけり兼續父も山城守といふ元僧なりまが還俗して武勇と事とし  
けり

○石田三成或雨夜のつれくになりしに直江と近付私語けるの卑賤よ  
り出て天下を治るの大丈夫の志なり我豊臣家の恩深し太閤斯世にお  
のまますさん中の思ひ立べからざれども終にの旗を揚天下をとらばや  
と存る也其時徳川家父子とば如何して討亡すべき武器を廻らしたま  
いらんやと語りまひ直江此と幸とや思ひけん是こそ志を所に候へさ  
れども徳川父子關八州と領し且蒲生氏郷といふ勇將に親しとあり斬  
く勝べからず先氏郷を滅し景勝に會津を賜りなんや然らば吾景勝に謀りて旗  
を揚我先陣して師と出さば其時西國の諸將たちとかたらひ押寄て



關東と討亡そべたよとてままくと相謀り終ふ氏郷と毒害し後秀行八十萬石の地と削て會津と景勝に秀吉賜りたるを此謀より事起るといへり

○直江兼續惺惺齋藤敏夫に對面せんといへども聞入られず兼續おして行たれば不在也度々招けども行ざるよ今日來りたるよも逢ず偽て他に出たるとや思ひんとて直江が許し行れまに直江其日關東よ赴死しかば跡と追て大津よ至て對面あり直江廢れたる家と急よ取立る時人臣の心得いひうよとと惺惺齋事と速にせんよせば却て敗るよ基なりとぞ答へける後に直江景勝よすう先て旗と揚させ必家を滅そべしと惺惺いひれしが果して景勝に事を起させたるが其功ならざりき

○慶長三年八月十八日太閤逝去其比 台徳院殿伏見よかひりまえて太閤の病重うりしかば關東に赴おせたまひん事延引なりしが俄よ十九日伏見を發して關東に歸させたまふ是 東照宮遠大の神慮なるべし

し四老奉行内々相計り徳川殿伏見よ有て權威日々よ増長そべし秀頼公よ早く大坂を移し諸方一同よ參り集りて尊敬そべ死事然るべしと東照宮に強て申て同四年正月十日大坂に移居あり 東照宮も送らせたまひて大坂を御出あり片桐東市正且元が宅に御止宿ありけるが十日のゆけばのに俄よ打立たまひて淀川を御船にて上らせたまふ處に枚方近く川岸よ人多く群りけり若や謀奉る叛反の輩よ有べきかと驚く處よ井伊直政が足輕と見ゆると申者何程なく御船近く成ければ脇五右衛門などいへる物頭跪きて待奉りて願て伏見よ入らせたまひぬ

又此時御乗物よ村越與三右衛門を乗せたまひ 東照宮よ倍者の騎馬の中に御まじり有たりともいへり又井伊直政の馬上にて御迎に出物具して其上よ常の衣服看たり直政が手の者皆下に具足と着弓鉄炮け者彼是二千計にて參り殊お御愛ありける彌八鹿毛を引



来りければ其儘打乗らせたまひて歸らせたまふもいへり  
此頃既に世間さまく言ふらゝいかなる事の出來らんと人々危ぶ  
みれもへり 東照宮も御屋敷も大竹よて菱垣と結せられ御門と押開  
き敵寄來らば堅固に防ぎ守らせたまふに設けあり御門とひらく事  
然るべからずと申者ありければ門を閉て守らば敵も侮らるゝなり只  
押はれて軍の支度とせよと仰有けるとぞ京極高次参りて大津の城へ  
引移らせられんやと進め申されけると聞召敵寄ば上は臺を押し上げ金  
札の宮の邊よて眞丸に成て一ト合戦とべし吾兵二千計やあらん敵何  
萬も恐れ打破る事うたからずと仰られけり正月十九日安國寺瓊長老  
生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帶刀四人四老五奉行の使として 東照  
宮も参りて伊達政宗福島正則蜂須賀至絳練組の事によりて徳川家獨  
擅なる事をも豊臣家の爲然るべからざる由申旨ありよりて世の中愈  
さまくなる風説あり其頃神原式部大輔康政伏見も上るとて二月廿

五日尾州宮も着けるが伏見の騒がしき由と聞日夜道を急ぎて道すが  
らにてさけば伏見よて既も 東照宮の御館へ敵押寄たりなせといひ  
よらそ廿六日の晩膳所よて伏見よりの飛脚に行達いまだ弓箭は始り  
申さぬと云と聞康政悦んで則膳所も陣し秀頼の下知と稱し伏見の騒  
に付東海東山兩道の人留るとも恐れさせて勢田矢橋を三日押留たり  
其頃の騒しきも諸國より聞傳へ京伏見も集る人殊の外多かりしに押  
留られ草津野洲を始として何萬といふ數計るべからず扱康政三日の  
後未刻に構へたる關所とひらかせられたれば旅人一同も京伏見に入る康  
政膳所と立て七千ばかりの人を率ゐて伏見へ入ければ京よて關東よ  
り數萬の軍兵馳着たりといひよらす康政小具足着て鉢巻も馬じるし  
押立て参りければ御前も召て御手づかす御けしと下されたり康政下  
知して御藏より料足數千貫出させ人々も分渡し内府の軍兵六万よて  
かけ着たれば館にて兵糧の用意俄に設けか終たりといひせて店屋物



を買來らしむ數千人京伏見淀に馳廻りて赤飯菓子さけやうの物一ツも残らず買來れば關東より十万の軍兵集りたりと人々思ひぬ者もなし是に依り石田が謀空しくなるといへり 東照宮柳生又右衛門石田が士大將島左近と同國のよきにて懇なりと聞え召され左近方へ行て物語して彼はいかにいぬらん聞て來れと仰有しかば柳生左近も逢て世間の物がたりいかに成べし事ならんといひければ左近聞て今松永明智二人の智謀決斷ある人なければ何事か有べきと打笑ひけり此子細は或時石田密謀に及びけるよ左近豊臣家の爲と存せんよ斯あらず止べしやされども爰も存る旨あり大事と企るよ我志す處と無二無三に決斷して少も猶豫あるべからずまかるに去年より度々仕課そべし圖と空しくせしたまぬ事多し既に時と失ひぬ能々世のゆりさまを見るよ石田の家と惡む人々大かた徳川殿も心と寄たり當家の存亡計るべうらず一日の過るも殘多し只理と非にまげて唯今まで

疎遠の諸大將達をもへりくだりて遺恨なく計ひて交を親しむまばらく時を待べきも一ツの計策にてよろこといひければ三成されば縦合一時に能志と違るとも後の安ゆるべき様と計る也といひけるよ左近いやしく事能く一時は勝と得るならば後に何の危き事かひべき内府も親き人々を積るよ其兵二萬に過べからず味方素より心を合する大國の人々又近國の兵を集るとも忽馳寄て五六万あり及ぶべし景勝卿再拜と取て下知を關東と攻破らんは何程の事かひべきとて又存る旨といひ出しけるよ客の來て三成座を立ければ樞原彦右衛門居残りて左近に向ひいかよも仰せざると也松永彈正明智光秀は無双の惡逆の者なれど事を決斷するよ誰か相並ぶべき此詮議の破り相手に頼むべきものをといひけるよかや其よよりてかく柳生よの答をけるよ也  
○石田三成と始先相組する人々加賀利家を推尊とて 東照宮と傾け奉らんと日夜相謀れり利家の長子利長細川越中守忠興と招きて累年



親しむたる間薄からせざる危からんと扶たまひんやと問るよ  
二代の知音よていへば聊鹿略いましと答らる利長尤も斯まそ有べけ  
れ頃日石田三成小西等相計りて内府は向島の館と攻圍まんと議決し  
ぬ潜よ知らせいどと語られしかば忠興熟々と聞て日頃の親しむ斯る  
大事と告知らせし事後かぬ事也心得いぬ明日参りて申合ひん  
とて歸られたるが

是はふまより前 東照宮の藤森よればしけるに井伊直政が土木侯  
土佐も一風よ乗じて御館の隣ある宅に火をかけなんよの危死事な  
りと申ければ 東照宮御寮所へ土佐と召て具よ聞し召れ其翌日向  
島に参りさせたまひたり

直又向島を参りて 東照宮御對面ありしかば忠興近習の人よ屏けて  
只今参る事別の子細もいぬ石田等黨と結び利家と依頼とまて君と  
し申べきと企い利長と年頃の親みよよりて具よ渡承りぬ彼等が謀

お落ざる御設を然るべくいへと申されけると聞し召過よし年信長  
攝州出陣の比弱年よて武勇の譽れありし故申通せし也斯る深志あら  
んども知らざりける悔まよと慨ばせたまひて榊原康政を召ていか  
と有べ死と仰有り事急にい後れては人に制せらるべまど申處よ忠興  
國の助けは人の與とる事最一ふいへば淺野幸長と召れいへ彼の必徳  
川家に心と寄すべしと申されれば頼て使と走らせらるよと取あへ  
お参りれたり忠興出向ひて事の子細と語るとよ人多き中よりとる  
事と知せらるよ事交れかひありかゝる時の疑の生じ易き習ひ候と  
て忠興幸長先誓紙と書て奉りぬ若敵よせば幸長の宇治川と固免候ひ  
なん忠興の敵れ中よ打交り不意に一軍仕候べしとぞ相計られたるさ  
れども是も始終勝と全ふべき道よもあらず利家と和平あるよ踰る  
事候まじ只兩人よ任させたまへとて其翌日忠興夙よ利長の許よ行向  
ひて昨日の密謀一々内府よ告たりとぞ語られける利長色と變じてあ



いそも戲あそふ候や實まことお候やと驚おどれけり忠興ちゆうきゆうされば愚者ぐしやも千慮せんりよれ一得いつとく候  
此事このことを思慮しりよするに石田謀いしだまうて兩雄りゆうきゆうと闘たたかひし其弊そのへいも乘のりんと料りょうもの候  
兩雄相闘りゆうきゆうあひたたかひて亡なびなば安藝あまのの輝元てるもと備前びぜんの秀家ひでゆきなど大將たいしやうとして吾等  
が如ごとき者ものの手てもなく攻平こうへいげなん所存しよせん見顯けんし候まう寛仁かんじんの内府のうふに與まて去  
そ家そのけをも起たすべけれ三成さんせいと心こころと合あせて名なと汚よごま身みと失うはんの必定ひていよ  
て候まうかく申詞まうことと許容きよく候まうひなばとく内府のうふと令親れいきん家けと和睦わくぼくありて世稔よせねか  
ならん事ことあそ然しかるべう候まうへ是こゝ全く前田家まへだけと佑たする處ところにて候まうと詞ことと尽つし  
て規誨きかいせられしかば利長りぢやうも深く思慮しりよして道理だうりに當あたれる事ことをもにて候  
さらば父ちちも申まうさばやとて利家りけも斯ごとく告つて利害りがいと詳あら語かたられたるに利  
家りけも諾うなせられけり

又一説またいひお五老ごらう五奉行ごへいぢやうの内争のうぢやう論不和ろんふわれ事ことあらば生駒なまがま雅樂がく頭あたま親正ちかまさ中村  
式部しきぶ少輔せうぶ二氏ふたうぢ堀尾ほりお帶刀たてわき吉備よこべ二人ふたり和平へいへいと取計とりけいふべいと兼あて太閤たかの遺言いごんに  
因よて井伊いゐ直政ちかまさも就まて和平へいへいの事こととははかられりともいへり 常山紀談卷之十一終

常山紀談卷之十二目次

- 一 東照宮細川家の難と救ひたまひし事
- 一 七人の大將石田と討んとせられし事
- 一 東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立せたまへる事
- 一 東照宮花房助兵衛に起請文を書と仰ふれま事
- 一 下野國小山にて上杉入庵義論れ事
- 一 渡邊總左工門野中市左工門忍て大坂に使用する事
- 一 上杉景勝會津表手配の事
- 一 東照宮小山の途中よて竹を伐せられし事
- 一 伊達政宗麿氣相馬の城下に宿せられし事
- 一 竹村半兵衛田中長胤と押止る事
- 一 岐阜城攻の事
- 一 森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事



- 一南都越後母表申とぬかさりし事
- 一兼松又四郎一柳の陣見切け事
- 一附兼松武功官上の事
- 一山田多門兵衛幼年功名れ事

常山紀談卷之十二

備前國 湯淺新兵衛元胤頼銀

○關白秀次生害の後細川忠興に家に罪蒙るべきと起れり其子細は秀次當時の大名財用乏しきより潜み金銀を貸たまぬふと有り是の人の心をとらんが爲且の財を利せんが爲なりけり忠興も黄金二百枚をかりてければ彼家金銀出納の<sup>と</sup>と司せれる人急ぎ彼金返たまふべしと券契を破り捨いへま左なかつんより太閤の奉行より券契を出さべしとぞ申ける忠興いかにも叶ぬべかつす此と太閤に泄聞えなば罪科も處せらると疑ひなまいかとそべきと案じ煩ひ長臣相集りて議しけるよ松井佐渡守申けるは某年頃徳川殿に御内なる本多佐渡守正信と親く相語らひひ彼み付て徳川殿と頼と慕らせん徳川殿はさる頼母しき人よておのしませばいかで是程のとよて人の家亡んとするを見捨てまふとはいまじと申忠興我日比内府と親しくもなし斯ると頼むに便



なまされども汝正信と親まかふんに試に計り見よといぬ松井本多  
にしかくのと有といふ徳川殿聞え召其儘松井を召れ人とのけて尋  
問せたまひ正信して唐櫃二ツ開かせらる一ツに黄金百枚づゝを入ら  
れたり其黄金は箱は題せし年月を見よと仰あり正信是を考るよ廿一  
年の前未三河は御座りし時よいと申す徳川殿松井に向はせたまひ  
凡金銀は出納の司あるとあて若人知れず用ひんとする時よ吾心に任  
せがたしされば此黄金と貯ると斯ると待よ年久し今其家の爲に吾  
年比の志達しけるこそ嬉しけれとて自是と松井は賜ふ松井大は悦び  
かゝる有がたき御とまそいひ終既に亡んどそる家の斯再び繼べくい  
と偏に君の御恩なり細川が家のいひん限はいかで此情を忘奉るべし  
速よ本國よ申下まて黄金先一上せ償ひ奉るべきよと申 東照宮聞  
し召しいや〜此事世は泄聞えなんよ雨家の禍にまそわれ夫故よ  
斯人知れず用ふべき料の物取出したれゆ先〜償ん事然るべからず

と仰せられ〜かば松井殊更に悦び急ぎ歸て此由と申いひんとて御前  
と立て出よけり遙經て忠興其事となく御館に参り御對面は序に正信  
と呼出し東照宮に向て申けるは年頃忠興が家人よ仰下され〜と謹で  
承りい何事のねはしますべきよいひはねども若御家よ事有ん時は必  
君の御爲國をも身をも捨て此度の御情に報じ奉らんするよていさり  
ながら忠興常よ伺公仕いはんよの本意を遂ん事叶ふべからず是より  
又素の如く疎々しくまろいべけれと御暇申て出ぬされは年頃忠興  
東照宮と親しうらすし利長を諫争はれ〜故に利家も一向我家の事思  
ふ也と心得て忠興の申旨よ従われと也

○慶長四年大坂は在たる諸將の中福島正則淺野幸長黒田長政己下七  
人石田と不和なりし人々使と以て朝鮮よ有一時各力を尽し軍せまに  
目付よ定ふれし福原右馬助直高垣見和泉守家純熊谷内藏允直陳大田  
飛彈守政信等私曲を構へ太閤に達せざりし事どもと憤りて罪科よ處



すべし由申やふれしより事起りて争論甚ましく使度々に及る七人の諸將此事たゞに止べしや石田と討亡しても必所存を遂べしとの趣と石田聞て上杉景勝にいひてそへきと問上杉も業じ煩ひしに佐竹義宣日頃三成と親しかむけるが是と聞て伏見より大坂に趣は三成が許し到ふ別に存る旨もなし只徳川殿に告て和平のたと頼むべし外謀有べからずとて三千計の兵を以て三成と伴なひ伏見と赴はければ諸將事と延したる故石田と逃しゆるよとて既追かけんとせられしと早伏見と着たふんと聞えしかば齒とみみてさて止けり 東照宮聞し召太閤在世の時の寵と頼とて權威に誇り無禮にも有ぬべし今又當りて諸將の申さるる所其理なれはゆふされども罪の疑はれぬ軽くすとかや聞ぬとて強てなだたたまひけれども尙止むべからざれば今世治りたるふ弓箭を起さんとや力なき事とも也我石田と心と合せ諸將と軍すべしと仰られまよより止事と得ずして怒を押返してさて止りぬ其のち

今世の乱となるべし又穩うならんとも一已に所存とあるべし暫く佐和山に退て公に萬事と相たづさいるとなくて然るべうらん子息集人正のとい我よく家を全ふせんとと計るべし三成と仰ふれしかば忝き由謝して佐和山に歸るべしや否景勝と相計りしうば景勝我會津と歸りて上ふす内府催促有ん其時悔りたる体を顯えて罵る程ならば必軍と出さるべし行がりにたやそく打破らまんと固く支て戦はん其間に大坂と討て出て素より心を合する諸將と集め旗と揚られよ是も過たる謀あるべしと覺えずと計ふれば三成佐和山と趣くよを定先ける三成が士大將島左近昌仲三成と勸えたるひ秀家秀詮も兩端と持するよや覺束なくひ佐和山の軍兵と計るよ一戦と決するに不足候まじ一千餘を止めて佐和山と守らせ蒲生備中舞兵庫高野越中と某各二千の兵と卒て風上より火をかけ所々と焔となして攻かふるやとならば内府拒ぎか給て引退れん所と追詰々々軍せを争か打洩とべ



き萬も一ツも志を遂ざるなれば潔く御腹召れいへ空しく佐和山に退  
きなば後悔するとも益少し居ながらはたら圖と外さん事口惜くい  
といひけを共三成の景勝と相策りま故昌仲が謀畧と納すして止ぬ三  
成既と佐和山と趣くに及んで七人の大將猶憤り深かりしかば道に俟  
て討取べしと言ぬらそ 東照宮聞し召今は打捨置ばや如何そべきと  
本多正信と召て仰あり正信ゆらく思慮して今日日本と取て徳川家と  
獻する者の石田にてある候へ其故の三成姦曲ある故人々惡きていへ  
ども又三成に與する者も多く容易く打亡うたへ故と言と禮儀お託ま  
手と徳川家よかりて亡さばやと存る人々いへば三成今亡て後悉く平  
均と歸せんや諸將外には殿と敬とといへども内には隙を伺ふ人も候  
いん故太閤の恩を得たる豪雄秀頼に背くも忍びず三成を憎むれ心を  
移して殿に懐き申とべし三成はらば殿を敬し重んせん事愈厚かるべ  
し三成久ま久人れ下よかむべき者よいの縁ば頼て弓矢取べき事掌

の中はあり三成に打勝たまひなば殿自然に勢いと得させたまひて誰  
か靡た従いでいへば日本三分の二は殿に歸服とべくい只三成も御心  
と付られればらく彼と立置きいあそしかるべからめと申けると聞召  
入られて三成が旗程心断なして結城秀康卿ともて送らせたまひけり  
○東照宮景勝を征伐し關東へ向いせたまふ時江州水口は御泊あり其  
明の朝長東大森大輔御膳を奉るべきと申て御約束ありしよ夜四ツ頃  
俄と水口を打出せたまひ御輿をかく者出合さりけるよ渡邊忠右衛門  
守綱草鞋脚半がけよて御輿のうたくとかきけると誰ぞと仰られし  
かば渡邊忠右工門おていと申を聞召何とてかく不意に打出るを知ら  
るぞと御尋有ければ若年の時より御傍よ仕へ奉りし身の是をせし事  
と任まじくいや情なき御詞なりとぞ申ける忠右工門宵よりかくはら  
んと押はかりて御輿の險たと枕よまて臥居たりけるとかや其夜土山  
お着せたまひて翌日水口は昨夜時と取たがへて早く立いひけると



仰遣されたり

○東照宮景勝征伐の御時小山にて石田兵を西國に起せると聞え召前  
よの景勝が勇將なるゆり西國を皆敵なりと人々驚死たりまに花房助  
兵衛職之と召て汝の近年佐竹が許し有て義宣が心のよく知たらんか  
よる乱よ二心有て軍と出ししが歸る道をや塞ぐべき又義宣謀反の志  
あるまじとならば起請文とかけて我を見せよと仰られしは花房承り  
義宣のきは先て信のあゆき人よゆへば別の子細はひまじ只人心の反  
覆は父子の間も計りがたき事よゆ起請文の御由るされを禁るべきと  
申す 東照宮助兵衛の浮田が家長臣と聞たりしに器量の小さき男よ  
とて大急ゆがせたまぬ花房かくと後お傳えさよゆれ起請文を書なら  
ば佐竹二心ゆらしと軍兵の疑を散せん爲の仰なりしを察せずして起  
請文を書ざりけるよる口惜けれたとひ義宣軍を出したりとも我何れ  
罪の有べきと深く悔とけるとぞ

○景勝と征伐せさせたまぬ時七月廿四日 東照宮下野の小山に御着  
陣ありける處に其日伏見より石田三成佐和山と出て大坂に至り諸大  
名と相謀り乱と起その旨告奉る則先陣の諸將と召を東條法印津田小  
平太本多中務大輔井伊兵部少輔と以て今度三成兵をあぐる間定て妻  
子たちを悉く押籠べし心中の難義察せられぬ且豊臣家のために企る  
旨申ふらせを秀吉の恩を請たる人々多ければとく大坂お趣き妻子に  
片付又の三成に心と寄らとんも少しも遺恨おゆらずと仰出されたり  
皆疑惑や有けんとかくの詞なかりけるに上杉義春入道入菴末席も有  
まが進ま出福島正則加藤嘉明黒田長政も向ひ各思慮も及ぶべから  
ず人じちと三成よ出し置只今御味方申て其質と棄ば妻子の恨世の誹  
ものがるべあらす秀頼公へ出し置たる人じちを三成横取おまたるな  
れば三成と一戦に及ぶ共妻子の恨世の誹も有べからず人のともあれ  
我の先御手とひき討死を遂べしと申されければ皆一同に御味方仕る



べいと決定しぬ其座は是はどの事辨へざる人のなれぬあらざるも索よりなまをも時にあたりて義春の片言拔群に聞えけると也

又一説に一座いまだとかくと申さざる處は福島正則何とて石田に従ひて弓箭とどらんや秀頼公は疎遠だにわいしまさずば神明は誓ひて正則御味方たらん事勿論なりといはれし故皆一決したりともいへり

入菴の上杉彌五郎とて越後上條は城主後民部少輔といひて景勝は姉婿なり

義春も能登れ島山義則の弟なるを五歳は時より謙信賞置れて上杉定實の養子とせしれしなり

謙信の先陣の大將にて武名世は高玄景勝新發田因幡守治長が謀反と討て新發田の城下よかしゆめらるる時治長切て出景勝の先陣を放生橋まで追崩し景勝の旗本の先に有しが日の丸の旗を取て三十間ばが

り先へ押出し手廻りの士どもかりしかせ鎗袋と作りて待かけたる故

治長引退くと追討にまたる勇將なり大坂冬陣は二條の御書院に諸大名出仕の時 東照宮入菴と召上杉家の武者かしの事ども御尋あり入菴詳に答へ奉るを聞き召上杉家の軍法索より聞及ひたる事ども深く

感じ入ぬと仰あり諸大名列座の真中に入庵小男なるが言語分明は其次第誠に懸河の如くなれば諸將何れも武功智謀は人々なれど詞と出

そものなく深く感じ入たる色なりけるどや

○同じ時國清公参議輝政朝臣の事小山よおとしまゑ大坂の北の方を誰か使を

べきとて慶長五年七月廿四日長臣を召て其姓名と書て出せと仰らる各承りぬとて其明る朝書付て出ると渡邊惣左工門とどあるしたる公

も左の袖より出させたまふも同じく渡邊を記させたまふりいかなる患難をも堪て事よく使すべき人なりと人々思慮る故なりさうばとて

渡邊を召て此旨を仰られまよ此の大事の御使よて候と辞ま申と衆議



一逃したる上りとかくの論に及ばざるを仰と蒙りさては今一人添  
ふれいへ人の病と申事もいへばと申ければ野中市左工門と相副らる  
書二通と渡させたまひて仰と承りけるが程なく東西の戦あるべき大  
坂も越くところよからぬ色の見えければ公たやそく關所と通り得じ  
若殺されたらば吾馬の前よて討死えたりとれもふべしたばかりねや  
せて大坂の屋敷不到らば今度の一番首取たるにもまさるべしとの詞  
よよと二人下人も召具せず七月廿五日小山と出て其比三河の吉田の  
公比領地なりーに巳が宿所へも立よらそ笠とかたふけて忍びて打す  
ぎ尾州熱田あつたに到れば船着に大竹の虎落とらとゆひて守りたり神職の大原  
左工門大夫の渡邊が知れるよまゑ有て潜お立よりたり爰ひて大夫が  
下人竹とかたげいちわら一把くより付て七八町計り先達て此としるしに  
案内者として伊勢の境も行って夫より野も山も皆敵の中と忍び通れば  
飯を乞べきやうもなくあら米とある關の地獄に行着ぬ行あふ人とよ

ゆやーとあられ關所にて殺されなんよく心得られよと口々にいふ關  
の有様傳へきくになかく通るべきやうの思ひもよらす伊賀越にや  
かゝるべき淺間越もや行べきと二人打かたらひて先伊勢の大神宮の  
祝上部左近が許も行って宿と借んと立よりければ今何方より参り詣る  
人あるべきとて取あらず左近立出て一宿の事はさて置ぬとく出  
よ棒にてたゞき出せと罵りけり二人にくき奴うあまさまく池田家の  
恩と請たる身なるよと怒れどもせんかたなく空しく立出る時左近追  
ついで何國の人ぞと問池田三左工門尉が士なりと答左近しうらばう  
まの川堤の下に乞食のそてたるむしろをかむりて待れよと小聲い  
へば二人さる様もあらんとていひゆる詞の如くまた夜に入て左近  
來り晝の乞食は何國にあるといふと聞てまゝありといぬさてひそ  
かよ相約えて左近が家の裏れ戸口より内に入り奥の一間に一ばし疲  
をやすえたり左近今の時家もある下人も打とくべきにゆら糸ば晝の



ごどくたのもしげなき事申したるよとていそぎ飯をしたう先出し夫婦給仕をしけりさてたり道の事を問ふ淺間越の人の往來まきなれば此頃は女乞食をも殺し中々通りかたかるべし只一命をかけ物にして伊賀越を通られいゝといへはさらばとて荷だむらをかひ敷たるつゞれよ身とやゆし御戒箱と笠にゆけ刀とも左近が許よおさいと見ぐるしき小脇ざしと求出して指たりけりかくて曉に宮川とうち渡り關所近くなりて見れば通るべきやうぞなれやがて一封の書をば深田の中よ深くかくま埋ま其日の行暮て山にぬしあくる朝一通の書をばよりにして青草ととりて一二三の印とし笠の緒として一の關所に行うる固焚たる士どもかゝる大亂は伊勢も詣る者やあるそれ打殺せとひしめけり二人のさゝがすとくよと伊勢に詣て此さわぎも及び一夜の宿ともかすべからずとの法令もよりいづうたよ泊るべきやうもなく進退さのまりてい大坂の妻子も心なく天照大神とたのみまかせ歸

りいぞとたばかりけりさうばとて荷だは御戒箱脇ざしの鞆を打くだき髪をとかせ帯袷たひあはせもくしまでも改見てゆやしき事もなきよとて通しければ夫より次の關所せきどとも事ゆゑなく打過て大和やまとの奈良ならも出て寺に入り酒を求て飲たりけるに住持ぢゆうぢの僧そうさうな忝らせよとて別よき酒と出し又薄茶をも出しなれば悦んで二人腰もつけたる錢をゆたふるお小僧多きとて請取す其時住持の僧の口能もたばかりて爰までれいしたれたまゝ爰まで忍ひ來る人もいへど皆關所よて殺されいよくだばうりたまへ故ある人とおぼえたりと語れば二人心の中よ打驚きたれども伊勢に忝りける物語りして天照大神も助ふれて無事よ下向するよてあるいゝ此より後もかくゆらんと氣づかひまくもいゝすと答ぬ借ゆくと聞て是を信せずならんよ別わかの事もいまじ關所を事故なく通られたらんよ朋友たちも奈良の出家の見ゆたるもの哉と語られよといふ二人見まられじと打笑ひ出て行く奈良と大



坂どの間も關所あり何者ぞと答えければ又前のとく伊勢も参りたる  
歸路おひといへばさらばとて改たりあやまじ事もなれお通さばやと  
いふ處も番の坐上も有ける老人物ないはせろ是非を論ずるに及ばず  
斬て捨よと下知しけり末座より眞の叅宮の者と見えいと斬て棄ば神  
の祟も恐ありと再三いひしかば二人は危き所とのがれて大坂に行着  
たり東國方の諸將の屋敷には虎落ゆひまひし大坂の兵士門々と警固  
して内外れ出入も絶たれば兼て知たる材木の商家も行て大根と買ひ  
もいや聲と聞知ると打廻りて大根を賣る眞似しけり久保田市大夫窓  
より見ていかに渡邊も似たる人もあるかなといひて大根と一聲よべ  
ば渡邊久保田が窓の下お行死笠ととり大根とさし出と内も宿と問へ  
ばしうく也と答て材木屋が許もぞかへりける野中も斯と告て悦ひ  
あゝ若原勘解由北れ方に属て有けるに久保田かくといへを門と守  
る大坂の士におとり薪と荷ふ人夫三十五人と出し其中一人と殘し

て渡邊を其うはりとま薪と荷ひて門と通る時警固れ士此男の今朝出  
たる者もあらずと押と焚たり久しく煩ひて打臥居たるが快くて今日  
出たる人夫なりといへども更も聞入らず勘解由立出てさまくおいひ  
断り通り得て北の方の前も参り公の仰とおまくと述て笠の緒とと  
きて奉る北れ方の簾と隔て對面あり其後渡邊に謀まえおたへたまひ  
買せらるゝ事大方なからず誠も危き所と遁れ得たる事ども也  
○東照宮會津と伐せたまぬ時景勝の謙信の影堂に前もて諸將士卒も  
二心有まてさとの起請文と書せ妻子をい會津もあ先焼草と積置り敵  
寄來らひ逆よせよせんとて所々の地形とならし白川も安田上總介と  
先陣とまて島津下々齋を二陣とし景勝は只一騎背矢の嶺も登り樵夫  
と案内者もあて山中と通り白川の境の明神も出兵をむうち不意お討  
てかゝる危死道を計られえよ上杉方も此をしらすまして寄手の露  
もあらず 東照宮の先陣大田原も陣して白川より一日の行程也景勝



大お悦て其勢八千と率ゐる長沼と陣し寄手白川と攻入ん時山中の間路より思ひもよらぬ後まはり 東照宮の御旗本と切て入り萬死一生の軍せんと謀られし石田兵と起そのよし聞えて 東照宮宇都の小山より引かへさせたまひたり

○會津征伐の御時 東照宮下野小山の途中にて左右の近習の人々に向はせたまひ我塵と忘れたりわれなる小竹林と申まなるべき細竹と切れと仰られしかば則切て奉るとたより紙と取出させたまひ鞍の前輪をかしまて切裂てくより付二ツ三ツ打ふりたまひ景勝などを打破らんには是もて事足ぬのたまへり實に塵と可それたまふはあらず上杉家の父よと己來武勇の家よと景勝驍將なれば人々あやぶむまよるゆり故に景勝と侮らせたまふの機と示させたまひまよ然る處は西國中國一同に御敵なりといひふくま小山より引返させたまぬ時又彼竹林と過させたまふは上方を攻破は此塵も無用の物也とて

棄たまひけり前後に大敵あれば人々愈疑ひれそるに故に猶々恐るるに足さるの機と示したまぬなるべし

○同じ時伊達左京大夫政宗は急ぎ本國を歸り搦手より攻入べたよま仰と奉り大坂と打立夜を日よけきて馳下る白川より白石まで皆かたきの中なれば道ふさがりぬ常陸國と廻りて岩城相馬にさしかりて國を歸らんとするは相馬まだ累代の仇也然るは政宗僅に五十騎ばかり引具えて常州と經岩城と相馬の境に到り先相馬が許に使とたて此度徳川殿上杉と征伐したまふにより政宗搦手より向ぬべたよしの仰を承りぬ路既に塞りぬひいりぬとにやうく此地に馳着ぬあまりいりや先て道とうちまゆゑ疲れぬ願はくは城下お旅館とたまひらばや馬の足休先て明日國を歸り入らんと存すといひせたり相馬長門守義胤まををたしあければ運の尽たる事どかさらぬだに伊達の相馬の年比のかたき也ましてや味方討ん一方の大將承りたるといふものとい



今宵一夜打して案内去らぬ奴原を一人も残らぬ討取て年比の  
 仇は報ひ又今度の賞にも預らばやとて願て民家としりひて迎へ入  
 れ人々を集て夜討の評定したりけり爰は水谷三郎兵衛といぬ者は  
 かの末座よりひたるが進み出末席の異見忍入ていへども既に兇謀の  
 座に連りて候へば所存を殘すべきにあらぬ抑窮鳥懐に入る時の獵者  
 もおれと殺さざるところ申候へ政宗やその大將年來の恨とてと君と  
 頼て來りしをたばかりてやとく討れん事勇者の本意よあらぬ  
 長き弓箭の取理ならぬや又彼が國境駒が峯に至らんに行程僅は三里  
 けふ日未だ未の時よさからぬ政宗が國に入らんとだと思はと日夕な  
 らざるよい至るべしそれよ儲の勢よて止る事深き慮なかららんや  
 只此度のよはよ警固えて國に返し重拵て戦ひお臨まん日勝敗を天運  
 よまかせらるべきにやと申ければ一座の人々此議に同じ兵糧秣を  
 鹽魚よ至るまでゆみ置かたりと焼て夜廻りを義胤が士も政宗おま

りおまづまりのへりたる体ころ心よくけれいざ試んとて夜ふけて後  
 馬二匹どりのなち人々走りちりて以の外よさわぎのよまる政宗小童  
 一人に燭もたせ白き小袖と上に打かけ左の手よ刀をさげて立出相馬  
 殿は御人や候といぬ是に候とて行向へば物音高く候政宗が下人原狼  
 藉候のんにをよくしすめてたまひり候とて又内よぞ入たりける夜  
 明をとも立もやらぬ已れ時ばかりよ成て義胤のよとよ使して一禮し  
 してさてしすめて馬と打て行くひろかよ人を付て窺しむるよかの國の  
 境駒が峯のあなたお伊達家は軍兵雲霞の如く立ちく出て出むかへぬ  
 かくて關が原は事終りて相馬すでも上杉に心合せたれを亡ぶべはよ  
 極る政宗訴を申されまの相馬の年比政宗がかたきなり石田上杉お與  
 したるが一定ならんおの政宗彼が爲よ討るべし然るよ君の仰奉りて  
 馳下るよしと聞て深き恨とてそれ新恩と施しき彼が逆謀に非るの証  
 よ候はずや又累代の弓箭の家永く断ん事不便の至り也と度々なげは



申されしうば後又は本領を相馬に賜りけるとぞ聞えし

○關が原の時三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子民部少輔長胤の父大坂方に同心したりといふときて宇都の小山と忍び出居城岡崎に歸りけるを國清公聞し召竹村半兵衛と召れり吉田お歸る頃まで民部と牛窪におさへど先置けと仰せらる竹村是の安き事に候はれどもいかさま計ひて見候はんとて道より出迎ひ鉄炮の者を百姓の家にゆくまかさ具に支度といひふくめ其身の山のせばと出出て待所より長胤來りて池田三左工門討ひそかに申せと申事の候て是に出候といへば長胤馬廻りの人と遠ざられまかば竹村静より歩より別れ子細も候はずおし留申せと三左工門下知えたるよと云もあへず左の手にて長胤とひしととらへ一尺計の脇指と抽て長胤おひ當たり從者どもこの口惜やと怒れどもせんかたなし竹村詞をかけ近くよられなば吾の殺さるゝ共民部殿とば刺貫き申さん唯れしと先申のよとて別の事

候はずと呼りける處は百姓の家より伏置たる鉄炮の者どもかけ集り鉄炮と長胤よさし當て竹村と討んとならば忽ち民部殿と打落し申さんと聲々に呼はりけり長胤力なく竹村に從て百姓の家へ入ればおし止て四方と堅く守りけりかくて東照宮聞し召父既味方と成る上りゆるしひへと仰られしかば長胤則出られけり後公に遭て手あさき有さまよもあひせたまひけるよといはれしとや

○岐阜の城を攻る軍評定の時國政公大手より向はんと仰られけるは福島左工門大夫正則聞て吾よろ今度の先陣なれとぞあらしめければ井伊本多公より向ひて内府の御縁者なを讓られしへと有ければ正則は尾越より西美濃に入て大手に向ひ公の河田の渡より寄させたまふと定りけりやと有て正則搦手吾よろ向ひし先尾越の城に遠く河田の遠淺なれば馬よて涉り易かるべし大手より向ふも城と早く攻破らん爲なれば只搦手よりよせんものと申されけると井伊本多正則の領地



なれば大手より船筏ふねいかたと以て渡されん事安かるべし三左工門尉さだむねのからめ手より向むかひ候へ既すでに定さだめる上は今更さらうへんも然るべからずと申されしかば正則ただたださては吾敵地わがたりのちも入いりて相圖あひつは煙けむりをわけて後池田殿川うしろいけだのせがわと渡されよといひて大手に向むかひ候まをり頃ころの慶長五年八月廿一日のまだ宵ぐらきよぐらきに公きみの清洲きよすとうち出河田いづはらのあたり陣まして居ゐれば廿二日にじふふたにちに曉あけに川涯がわよおしよせたまへば伊藤五郎右工門いとうごろうごもんと云もれい岐阜ぎふより津田藤三郎つだふさぶらうと始はじとまて新加納村しんかのむらよおし出して陣ましたり味方の軍兵勇いくさぶと進んではや川がわよ打入うちいらんけしななり公馬きまを乗廻のりまわし今まばしどと下知したしせさせたまふ此時貝福右工門かいふくごもん時ときのよかりぬと申せば公然こげんるべと宣のたまひひふる詞ことばの下よりさかまく波なみも馬うまとさ竹たけと打入うちい二三間歩ふたさんまませ鞍くらのはひひかりささがり貝かいに川水がわみづとすくふて打うちううけいいううにも高く吹出ふきだそ寶螺たからの聲こゑ諸陣しよじんひひささきたる是より一同いっとうに打入うちいて一騎いちきも残のこらず向むかの岸しに打うち上ある

須賀平四郎物見すかへいしやうものみたりしが乗歸のりかへり敵の多少おほすくの蘆原あしはらを隔へりて見えわかすしいいななども二三千ふたさんせんにいよも過ぎすひひのし軍いくさの味方あじの勝かちと申まをそ子細こさいのいかいよよと問とたまへば須賀敵すかたりのちの後陣のちのまのいかいずず後のちよ兵へいと伏ふべき地ち十町じゆうちやう計はかりがいややとあるべしとも存ぞんせず遙はるかにいかいけけ來きりいななば人馬ひとまの息いき切きれてよよきととままなるべしと申まをも果はぬぬよ伊木清兵衛いきせいべゑ忠ただ次つぎ味方あじの旗はたは前まへにかたかひひき陣じんの色いろくろみみたたと敵たりのちは後のちに仰あやて人の面白おもしろくい必かな定さだ味方あじは勝かちななとといいささととり

公味方きみあじの陣じんと整ととのへよとだりに進まひなと下知したしありけれれどもななとためらふふべき吾われおどららじと進まよよく事こと三町さんちやうばかり公きみ今は時ときこそよけれと腰こしに指さたる塵ちりと取とて一振ひとふりふふらせたまへば一同いっとうよととめめと打うちてかかりり忽たちち敵たりのちと撃う破やぶられけり八田やちだ太郎兵衛たろうべゑ久次ひさつぐ北きたる敵たりのちを追おりけたる雁かりも朱色しゆしきの物具ものぐ着きて紫むらさのいろろかかけたる武者むしや一人ひとり息いきつき居ゐたると見て馳はり寄よりたるの武者むしやのうち立たなるががびたたと折をりりく八田やちだ馬うまより飛とり下くだり鎗やりを合あせ遂すに



討取たて是前田半左工門なり

半左工門ハ徳善院ハ從子マテ岐阜中納言秀信の近習の臣ナリ打見た  
る處ハそぐれて溫柔マシテ常ニよく論ニたへたる人ナリまかば人々  
男子ニ移らずと笑ひし此日の軍ニ敗軍の中に武市忠左衛門と二人  
ふと止り引立たる味方をはげましけりやつとけと呼りて目と驚  
そいたらさして武市も討死す日比前田と侮りたる者どもけふ前田  
及ぶべきやうもなしといへり八田ハ父と彌三右衛門正久といふ士大  
將也太郎兵衛今年十八才父の陣代たり前田と討取たりしは從者柏原  
奎石衛門尾關彌五左衛門かけ來り八田と馬に乘せて歸る八田後ハ人  
ニ語りていはくこれ年若し血氣よく死なばならず敵一人討取てさのま  
疲るべきにあらざりしに其時たぞけ來る敵あらば小兒にも生捕とせ  
らるべし死生ハ間に立て敵と討得て却て勇氣のおとるへたる故なる  
べしと語りける慶長六年祿二千石と増與へられ同八年公參議ニ任

じ參内の時久次太刀の役たり從五位下ニ叙し丹後守と稱し後豐後  
守と改む前田利長久次が武名を聞一萬石マテ招かれしうどもゆゑ  
ざりしと也

福島正則ハ大手の惣大將にて素より他人ニ超られじと思はれしに公  
既ニ新加納にて敵を撃破りたりとき怒もだへて廿三日の朝先陣し  
て攻寄たり池田家ハ軍兵朝日口より攻入けると惣がまへの土手の上  
より見て人の功名と嫉み道全といふる法師武者ニ下知して町口ニ火  
と懸させたれば搦手の軍兵烟ニひせびて進み得ず公これと御覽じて  
ふハ心得ぬまじ也火の死ゆるを待べきあやとて桑木畑とめぐり長  
良川より後の水の手におし寄たまふ池田吉左工門は公の此城ハおは  
せま時水門に居て案内ハよく知つ水ぬ死の有けるより入て水門と打  
破り旗を差上げ池田三左工門尉本城の一番乗と呼りたりと正則の遣  
と妨られしハ却て池田家の幸なりと後に人いへり 東照宮御書を賜



はり敵軍川を隔て相支る所に輾く打破り岐阜を攻落されし功名賞と  
るよ詞なしとぞ書せたまひける

○岐阜中納言の士飯沼小勘平といへるの四天王と世にいわれ剛の  
者なり新加納の軍破れ一時小き塊を前よして居たりしと池田家の士  
大將森寺政右衛門忠勝が第四郎兵衛長勝飯沼を目がけ一間あまりゆ  
り溝と馬に聲かけてひらりと飛せたり飯沼が左右より鉄炮を打懸  
けれども甲冑おわたつて其身の手も負ず競ひかゝりしが敵の多勢つ  
やくとや思ひけん飯沼が者どもちりく成ぬ森寺馬を乗寄れば飯  
沼名のれと詞とくる池田が内の森寺四郎兵衛と名乗る飯沼池田が  
内の森寺なすばいざといふより刀と拙て森寺が馬より下んとする處  
と右の膝口と切たりしかば森寺左の方より飛下り馬と隔て切合けるが  
又左の腕に流と蒙り今の叶はじと思ひて白刃を握り掌とくられなが  
ら無手と組飯沼をかさる透さず刺通せしが疲ればて首と取られども

既人お奪るべうりまに従者久兵衛といふ者走り來り近づく者と  
追をらひ馬に挿れせて興國公武藏守利隆朝臣の事十四五騎よてひか  
へたまふ處に参りてかくと申す又國清公の御前よ参りて飯沼と組で  
討ていと申けり

飯沼が冑は小田原鉢刀の行光の作脇差の菊一文字森寺が従者分捕  
して今森寺が許にありといへり森寺が飯沼と討取り事關ヶ原記其  
餘に書にも池田備中守として記せるの謬なり

○岐阜の城攻に池田家の士南部越後門際よ押詰たるに門のくゞり狭  
くかけたる得るよ支へて入得ずかたへより母衣申をぬいて入べしと  
いへどもいやくたどへ入得ずとも此はるのぬくまじと呼べる其中  
お門ひらけて馳入たり其武者振甚見事なりまど其時の人いひしとなん  
○岐阜の城に諸將おし寄る時一柳監物直盛の兵一騎先駆して川に馬  
とさりと打入り直盛に付られける目付兼松又四郎正儀九尺計の十



文字の鎗と提鹿毛なる馬に乗て堤の上よりひかへて是と見あひれ剛の者よ老武者若武者かと問るゝに直盛聞て安井新九郎とて今年廿二三にや成候のんと答ぬ正儀吾ならば功名ととぐべきよ若武者なれば惜き事よといひも終らぬよ安井向の岸より待かけたる敵の中よりかけ入て討死しけり直盛馬を蹴たてて進むけまきよ見えしと正儀おし止先早く候とてやう有てまゝと云まゝに馬を川に打入れしかば直盛もおどらじと渡されけり敵敗北まけるよ正儀閻魔堂のこなたにて追かくる味方とおしどむる直盛なぞ追討さるやと問るゝに敵はや陣や整たり引かへさば一定味方崩るべし百々木造の岐阜の古兵なれば陥み止んと思へども地の理なくて退くならん今見られよ返すべしといひも終らぬふ竹林によりて鉄炮と打くる正儀少しもさびがす相向ふことまばらく有て城兵遂に引退く

一説に津田藤三郎光房の秀信の士なり敗軍の中に引返し朱の物具

し赤得るかけ鹿の角の立物打たる胃と着月毛の馬に乗て引色も成たる味方を勵し散々も戦ひけるを兼松見てよき敵なりと目とかけて追かけたるに其間十間ばかりに成ける時津田光房引返して城引取けり黄母衣かけたる武者取て返し正儀と見たり合戦ひしが相引よ引といへり此時よ又前よ川と渡したる時の事なりや詳かならず正儀敵はあて一面目有よ似たり此より返さじといひれけり直盛岐阜の町口にて將机よ寄て鎗と横たを敵出ば一鎗せんと正儀の方と見やられしに正儀いや敵の出候のじと云しよ果して軍のなかりけり亂まづまて後直盛正儀を饗し今度の軍毎事仰の中りて候中にも安井が討死と察せられしいかなる子細も候と問れしに正儀聞て死生有命と申候ていりて人力の及ぶべたさりながら川を涉りて先陣をる時よ馬の逃げ場二三十間も置て敵の前と横さま乗るほどに味方けりく時大音よ名乗べき事候左もなくして唯一騎岸に打上り敵の真中よ



かけ入り討死すれば敵に利と得さるるまで候時より地により進退のまじさかはり候物なりとよく老兵に承り置て候はとよ六十も及て猶ながらへ武功をも遂候とぞ語られける

台徳院殿御上京の時熱田にて國土御目見に出ると元兼松も同じく出らる土井大炊頭利勝と以て今川義元合戦の時功名利根山にて信長より足半を賜りし事猪子内匠兼松と年いづれまゝたるやと御尋わす御覺まは猪子と年まゝと思召との事なり兼松承り信長義元合戦の時朋輩七八人一所に打立候が馬と乗るまなひいな事と見候へば鑑を逆み掛たり心中よ不吉とれもひ其日勇まなく進み兼候へば功名一たる者手をふさがす見苦まとして朋輩ども取たる首の血と甲あ塗り草摺み泥をぬり朋輩の中よ交り信長の前に出れり義元の首と信長見て悦るゝ時お参り合たり元刀根山よて前夜觸あてしにれたりて信長はや打立れける故草鞋はく間もなく跳にてりけ付首取

たれば信長見て太刀のさやよ付られたる足半と賜り候別よさせる事もなしと申上る利勝猪子と年いりいと問るゝよろれり御見ちがへ也内匠の目れより二ツ若しと答ふ利勝御覺と御自慢の事なれむわかしと申されなばよかりなんといぬ兼松いや〜詐り申されずと答たるまゝよ利勝申されしかば大よ御感有て時服よ黄金と添て賜りりけるとぞ

○河田の渡とよして岐阜お向ふ前堀尾信濃守忠氏川岸よ陣せらる池田家先陣の士大將伊木清兵衛忠次使を以て池田が者ども川よ打入て後渡されぬ今度の先陣は池田が承りたるにていとぞ申ける忠氏聞て暫く馬より下立て吾下知と待候へと云れりれば山田多門兵衛十五歳軍のけぬを始也馬より下んとするを従者馬より下るとや候鞍の前輪よ取付俯に成て待れよと教へかば山田まかしたりけるまやと有て忠氏の旗本よ寶螺れ聲せしうば我先よと馬に乗しよ山田眞先お川に

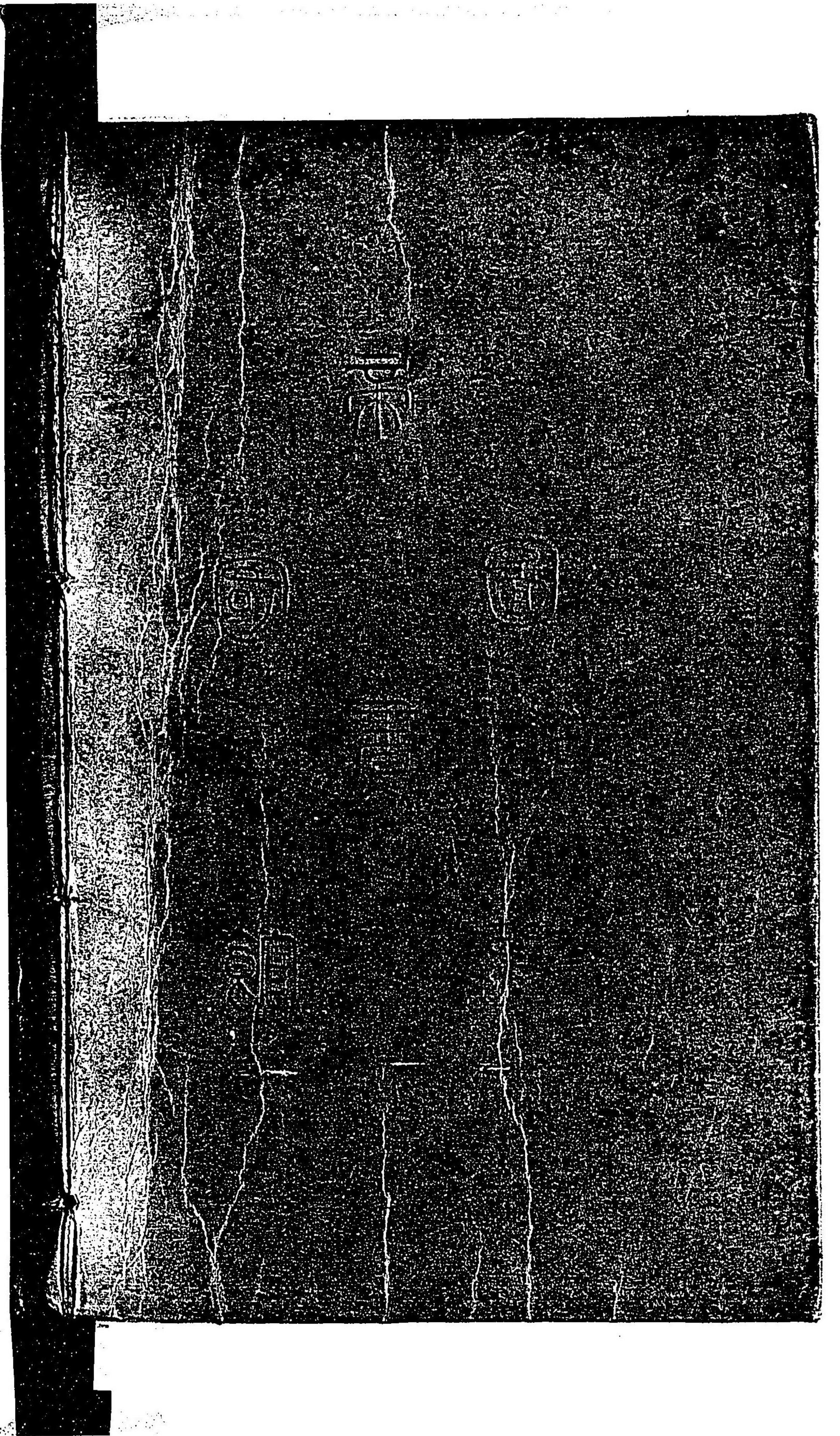


打入て渡しけるが遂よ一番首と取たるの従者の物なれたる故なりけり後よ吉晴此日の勝軍の告をきく首帳と見られしよ首一ツ山田多門兵衛とあるしたると讀も終らせ近き頃まで竹馬に乗たる童のはや功名まけるよ父ながらへ居たふんよいいうぱうり悦ばんとて涙と流されけり又梯はし權八が功名のなきいか討せん知らせ功名は二三人の中とをづるよ者あはせとゆや一まれしおやがて飛脚來りて權八一番にゆいて首を取られども手負て帳に記す事おろかりしと告たりければ吉晴吾見る所よも違へじとれもひゆるよと云れたり



183  
5  
279







常山紀談

五六

183  
合 5  
279